

〔附論 一〕

漱石のスターン論——『トリストラム、シャンデー』私注

一、『トリストラム、シャンデー』執筆まで

明治二十年代の「英学生」であった夏目金之助が、ローレンス・スターンを読み始めたのが何時どのような動機によつてであつたかは今のところ分かつていない。夏目金之助の帝国大学文科大学の英学生としての主な活動といへば、アーネスト・ハート Ernest Hart の「催眠術」の翻訳（明治二十五年五月五日『哲学雑誌』、匿名による）と、論文「文壇に於ける平等主義の代表者」ウォルト、ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」（明治二十五年十月五日『哲学雑誌』「雑録」、匿名による）、それに、当時の英語教師オーガスタス・ウッド Augustus Wood の「詩伯「テニソン」」の翻訳（明治二十五年十二月—二十六年三月『哲学雑誌』、匿名による）、等があるが、この他にも、英文科教師のジェームズ・メイン・ディクソン James Main Dixon に頼まれた『方丈記』の英訳や、文科大

学英文学談話会での講演記録「英国詩人の天地山川に対する観念」(明治二十六年三月—六月『哲学雑誌』、署名付)がある。さらに、明治二十三年(金之助二十四歳)文科大学入学の直前に発表した「十六世紀の日本とイギリス」(第一高等中学校本科の教師、ジェームズ・マードック James Murdock に提出した英文のエッセイ、明治二十三年七月『みゆーぜあむ』)を加えてみると、二十台半ばの英学生の文学修業としてはまことに多彩にして早熟、かつ言語的エネルギーに満ちたものであったと言ふべきであろう。その活動は、金之助の周囲には少なくとも注目すべきものと映つたであろう。⁽¹⁾

ところが、明治二十六年大学卒業後から明治三十年に『トリストラム、シャンデー』⁽²⁾を発表するまでは、殆ど何も書かなくなつた。その間の金之助自身の内実としては、談話筆記『処女作追懐談』にあるように、「卒業したときには、是でも学士かと思ふ様な馬鹿が出来上がった。それでも点数がよかつたので、人は存外信用してくれた。自分も世間へ対しては多少得意であつた。ただ自分が自分に対すると甚だ氣の毒であつた」といつた具合に、お yourself としては必ずしも納得のゆく大学時代とはいへなかつた。後年の『文学論』の序に言う、「英文学に欺かれたるが如き不安の念」もこの時期の金之助の内面を暗示するものとして疑ふことはできない。あるいはまた、ここに「漢学に所謂文学」と「英語に所謂文学」との葛藤による悩みを持ち出してもよいが、金之助にはもつと根底的な厭世感があつた。これは大学入学前から根強くあつた感覚で、それは、正岡子規宛ての書簡が示すように、「この頃は何となく浮世がいやになりどう考へ直してもいやでいやで立ち切れず、さりとて自殺するほどの勇氣もなきはやはり人間らしき所が幾分あるせいならんか」(明治二十三年八月九日付)⁽³⁾ というような感じであつた。

明治二十八年に松山の愛媛県尋常中学校へ赴任する前年はとくに金之助の神経衰弱が悪化した時期といわれる。この年彼は、松島瑞厳寺、東京法蔵院、鎌倉円覚寺の三ヶ寺で参禅をするところまで追いつめられていた。しかもなお、彼は安心を得られなかった。しかし、新任地の松山での夏目金之助教師は、その日本人ばなれた英語の発音でいたずら盛りの生徒たちの度肝を抜き、給与も校長をしのぐといった、いわば特別待遇を受けて、外見には結構な身分に見えた筈だが、内心のゆううつは隠せなかった。金之助はまた子規に宛てて、「この頃愛媛県には少々愛想が尽き申候故どこかへ巢を替へんと存候。今までは随分義理と思ひ辛防致し候へどもただいまでは口さへあれば直ぐ動くつもりに御座候。貴君の生れ故郷ながら余り人氣じんきのよき処では御座なく候。」(明治二十八年十一月七日)と書いて、翌二十九年四月、熊本第五高等学校講師へと転ずるのである。そしてこの年の六月、貴族院書記官長中根重一の長女鏡との結婚式を挙げる。その結婚に至る心の経緯も、「中根の事については写真で取極候事故、当人に逢た上でもし別人なら破談するまでの事とは兼てよりの決心」(明治二十八年十二月十八日、正岡子規宛て)といった程度の、つき放した他人事のような見方である。これは、金之助二十五歳時の、「銀杏返しに竹なは(たけなが)をかけ」た美しい娘や、妊娠中毒症で死んだ三兄直矩の妻登世とせへの思いとは大いに異なると言わなければならない。しかし金之助は、鏡との初対面の時、鏡がその歯並びの悪さを気にもせず隠しもせずには笑う、その素直さが気に入ったという。鏡の悪妻説は有名な話だが、鏡と金之助の仲はその実うまくバランスが保たれていたのではないか。金之助としては鏡の中に自分が解放される部分を見出して、彼女の人生を引き受ける決心をしたのであつたらう。新婚の家で鏡が病に伏した時、金之助は明け方まで鏡を看病したこともある。その折のことを、「枕辺や星別れんと

する^{あはた}辰」という美しい句に詠んだりした。

しかし、結婚して一家を構えてみても、また五高教授に昇任（明治二十九年七月）してみても、「英文学者」としての自己が確立したという確信は持てないままであった。このような内面を抱えて、金之助は、明治三十年二月九日、『トリストラム、シャンデー』を書き上げたことになる。同年三月『江湖文学』第四号に「夏目金之助」の署名入りで発表された。この年の六月には実父直克が死去、七月には鏡が上京中に流産し、これが彼女に崇つたのか、翌三十一年に彼女は白川の井川淵に投身自殺を企てるという大事件を起こしている。いわば内憂外患こもごも至る情况の中で、「英国詩人の天地山川に対する観念」以来、四年ぶりに達成した英文学的著作が、『トリストラム、シャンデー』であった。

わが国に初めてスターンを紹介する榮譽を担ったこの論文を書いた後も、金之助の内部では、「教師をやめたい」という気持ちが動いている。彼は子規に宛てて次の様に書いた。「単に希望を臚^ら列^れするならば教師をやめて単に文学的の生活を送りたきなり。換言すれば文学三昧にて消光したきなり。月々五、六十の収入あれば今にも東京へ帰って勝手な風流を仕^{つかま}つる覚悟なれど、遊んでをって金が懷中に舞ひ込むといふ訳にもゆかねば衣食だけは少々堪^{かん}忍^{にん}辛^{しん}防^{ぼう}して何かの種を探し（但し教師を除く）、その余暇を以て自由な書を読み自由な事を言ひ自由な事を書かん事を希望致候。」（明治三十年四月二十三日）

刎頸の友というべき子規にはそのように我が儘を書いたが、英文学者金之助はなお、熊本時代に二つの英文学関連の論考を著わしている。明治三十二年四月の「英国の文人と新聞雑誌」（『ホトトギス』第二卷第七号、署名に「漱

「石」が見える。同年六月二十七日付で第五高等学校『龍南会雑誌』七十三号に転載、及び三十二年八月の「小説」『エイルウヰン』の批評」(『ホトトギス』第二卷第十一号、「漱石」の署名付)である。この二つの著作で金之助が、それまで子規の号の一つを借用して句作に用いていた「漱石」を名乗ることになったのは注目してよい。

金之助の留学は右の二つの文章を書いた翌年の明治三十三年九月から(金之助三十四歳、留学年令としては少々高すぎたであろう)であるが、この英国留学までの著作は、同時代の英米の文学への関心もさることながら、一時代前の十八世紀英文学への遡行の傾向を示していると言える。『トリストラム、シャンデー』はいうまでもなく、「英国の文人と新聞雑誌」は十七世紀から十九世紀にかけてのイギリスの新聞ジャーナリズムの概観を試みたものだが、その半ばはアディソン、ステイール、フィールディング、スモレット、ジョンソン等の十八世紀の文人たちの活躍を活写したものである。「英国詩人の天地山川に対する観念」のばあいも、その冒頭に、「茲に所謂英國詩人とは、十八世紀の末より十九世紀の始めへ掛けて、英國に現れ出でたる新詩人にして、夫の自然主義(naturalism)と申す運動を鼓舞せる面々を指す」とあるように、バインズやワーズワスをのぞけば、ポーブ、アディソン、ジョンソン、ゴールドスミス、グレイ、クーパー等の十八世紀詩人論が中心である。

ここで興味深いのは、これらの著作に共通する金之助の論述の方法意識である。例えば、「英国詩人の天地山川に対する観念」の中のポーブを論じた一節にこうある。「作者自ら牧歌論(Discourse on Pastoral)を草して篇首に掲ぐ。其窮屈なる、讀者をして妙に驚かしむ。其上日本人が讀んで一層面白くなきは、詩中に引き合に出さるる古名なり。例へば「ダフニス」とか「アレクシス」とか云ふ字を遠慮なく駢列し、東洋の讀者をして思はず欠伸せし

む。」ここには明らかに「日本人」としての、「東洋の讀者」としての、西洋文学に対する受容の主体者意識アイデンティティが見られる。このことにおいて金之助は極めて率直、誠実である。

しかも、このような自己の受容の感受性に対する忠実さ、夏目金之助の根本的な廉直さは、英文学関連の初期の著作に限るものではない。『トリストラム、シャンデー』を書く前年のエッセイ、『人生』（明治二十九年十月『龍南会雑誌』四十九号）の主題も金之助の誠実な姿勢を明瞭に示している。『人生』は、どのような「不測の變」が外界に起ころうと、どのような「思ひがけぬ心」が自分の心底に湧き出てこようと、決して狼狽せず、「人間の主宰」としての、自分自身の「心の自由」を得たいという願望を告白したエッセイであり、自己の根底的な厭世主義を克服しようとした試みでもある。後年の『門』や『彼岸過迄』及び『行人』につながる主題がすでにこのエッセイの中にあるというべきであろうが、この主題が英文学に立ち向かう場合にも同じように息づいていることが、夏目金之助の本来の面目であろう。このことはまた、後年の講演、『私の個人主義』（大正四年三月『輔仁会雑誌』）にいう、西欧追隨の「他人本位」を拒絶した「自己本位」の実践としても捉えることができる。「自己本位」の姿勢が英留學によって初めて可能であったというふうに、漱石の言葉通りに受け取ることができないであろう。

こうした姿勢はさらに、「漱石は、昔から、自分自身の内面生活と直接交渉を持たないものは、決して表現することがなかった」（小宮豊隆）というふうに言いかえてもよい。いずれにしても、金之助の書くことへの意志と「人間の主宰」者としての自己意識とは、留學以前から、ということとは作家漱石になる以前から、すでに深く結びついていた。それ故、『トリストラム・シャンデー』（一七六〇—一六七）という作品もまた、夏目金之助のアイデンティテ

イにふれるものがあつたとしなくてはならない。

二、『トリストラム、シャンデー』論の構成

『トリストラム、シャンデー』論の全体の構成を図表化してまとめると、次のようになる。テキストは昭和三十二年岩波版漱石全集第二十二巻『初期の文章』に拠る。段落の数は全部で25に分けることができる。

D		C		B	A	区分		
(4)	(3)	(2)	(1)		(3)	(2)	(1)	小区分
喜劇的要素		小説技法としての「脱線」について		『トリストラム』の構成と登場人物	〔導入部〕文学史的概括 批評史的概括 『説教集』と作家の資質	主 題		段落番号
印刷上の奇抜さ		ヨリックの姿勢のこわばり アルファベットの羅列法 構成上の「非常識」				⑤ ⑥	④	
⑪ ⑫		⑩ ⑨	⑦ ⑧					原著巻・章
VI IX 40 4		IV .. 24	I .. 8	II .. 17	IV .. 27 28	VI .. 6 10	III } IV	

G	F	E			
	(2) (1)		(7) (6) (5)		
結語	剽窃問題 文体論（長句法・短句法）	〔センチメンタリズム論〕 笑いと涙	〔ヒューマー論〕		
			「野卑に流れて上品ならざる」	トビーとウォルターの比較	ウォルター・シャンデーの奇想
②⑤	②④ ②① ②③	①⑧ ①⑨	①⑦ ①④ ①⑥	①③	
	III II 27 12 29	VI I 10 12	IV .. 27 28	II V 3 3	II I 19 19

このように全体を分類してみると、金之助のアプローチの方法が、今日から見ても（時代的な研究資料上の制約にもかかわらず）巨視的かつ微視的見解をバランスよくそなえた、明快なものであることが分かる。

導入部（A）の(1)「文学史的概括」は、金之助の巨視的把握の巧みさを示している。

「今は昔し十八世紀の中頃英國に「ローレンス、スターン」といふ坊主住めり、最も坊主らしからざる人物にて、最も坊主らしからぬ小説を著はし、其小説の御蔭にて、百五十年後の今日に至るまで、文壇の一隅に餘命を保ち、文學史の出る毎に一頁又は半頁の勞力を著者に與へたるは、作家「スターン」の爲に祝すべく、僧「ス

「ターン」の爲に悲しむべきの運命なり」

金之助の語り方が冒頭から「昔語り」のスタイルを取っているのは、この難解極まる世界文学上の奇書ともいべき原作を、当時まだ英国文化に対しては開化以前だったであろうわが国の読書界に出来る限り親しましめようという、啓蒙的な著者の配慮のためであろうか、他の英文学関連の著作とは異なる始まり方である。ここで今一つ注目してよいのは、「作家」スターンと「僧」スターンという対照法をもつて論述する仕方である。金之助の明晰な文章を支える修辞の一つである。

〔A〕の(2)「批評史的概括」は、英文学史上から見たスターンの評価の問題を集約した部分で、金之助の得た文学史関連資料の時代的傾向あるいは制約が自ずと明らかになる。金之助はまずカーライル、レッシング、ゲーテの好意的スターン評を紹介する。「スターン」を「セルバンテス」に比して、世界の二大諧謔家なりと云へるは「カーライル」なり」という、カーライルのスターン論は、彼が「ジャン・パウル・リヒター論」〔『エディンバラ・レビュー』一八二七年〕の中で展開した論旨である。ここでは、セルバンテスは「ヒューモリストの中で最も純粹な作家」であり、ドイツでいえばジャン・パウル、スターンはこれらの作家に並ぶ価値を有する、と主張している⁽⁶⁾。ちなみに金之助の視野からはジャン・パウルが消えたということになる。次に、

「二年の歳月を擧げて其書を座右に缺かざりしものは、「レッシング」なり、渠の機智と洞察とは無盡藏なりといへるは「ギョーテ」なり」

とあるのは、ドイツにおけるスターン崇拜の背景にふれた一節である⁽⁷⁾。『トリストラム・シャンディ』のドイツ語に

よる翻訳はツュッケルト（一七三九—七八）による（一七六一及び一七六三年）のが最初だが、スターンの名声と崇拜熱をもたらしたのは、むしろ一七六八年に『センチメンタル・ジャーニー』が出たのと同年に出たボーデによる独訳であった。ボーデは翻訳のさい、「センチメンタル」の訳語に困り、友人のレッシングに教示を仰いだところ、レッシングは「empfindsam」という形容詞を案出したという。ちなみにフランス語の訳者フレネーはそのままの形でフランス語に輸入している。当時は新奇な言葉であった。レッシングはボーデ訳の序文で「もしスターンにあと五年の執筆のための命が許されていたとしたなら、自分は五年分の命を彼のためにささげていただろう」と言う程の崇拜ぶりであった。ゲーテもまた、『ウェルテル』を書く時、スターンの「センチメンタリテイ」の影響を強く受けたといわれる。ゲーテの右の評は、彼の一連のアフォリズムの中に出てくるものである。

次に金之助が取り上げるのは、バイロンとサッカレーのスターン批判と剽窃の問題である。

「生母の窮を顧みずして驢馬の死屍に泣きしは「バイロン」の謗れるが如く、滑稽にして諧謔ならざるは「サッカレー」の難ぜしが如く、「バートン」「ラベレイ」を剽竊する事世の批評家の認識するが如きにせよ……」

バイロンの批判は、かつてウォルポールが、その書簡で取り上げた（『ウォルポリアナ』一七九九年）点をスターン攻撃の材料に使ったもので、よく引き合いに出される話である。それは必ずしも事実ではないのだが、一種の否定的神話として定着したのである。しかし、スターンの実母や妻エリザベスとの関係が必ずしもしつくりゆかなかつたのは事実であつた様である。スターンは家庭的な幸福とは縁遠かつた人であつた。この点は夏目金之助の家庭の条件も思い合わされるところである。⁽⁸⁾

「驢馬の死骸」の話は、『センチメンタル・ジャーニー』の「ナンボン」(Nanpont)のエピソードに出てくるもので、スペインへの巡礼の帰りに愛馬に死なれて嘆く老人の慈愛心を描いた場面である。⁽⁹⁾しかしじつはバイロンは、スターンを単に人道主義的に批判したのではなかった。彼は一八一二年、自分が上院議院でのスピーチの義務をきちんと果たせないでいることが苦痛で、そのことへの反省をこめて、「俺もあのスターンの犬野郎と同じだ」と自嘲的にその日記に書きつけたのであった。⁽¹⁰⁾

サツカレイのスターン論は、『十八世紀イギリスの諧謔家たち』*English Humourists of the Eighteenth Century* (一八五三年) に収められたもので、スターンに対する酷評で知られた。サツカレイはスターンを評して「偽善家、放蕩者」と呼び、「道化師としては大した者だが、偉大なヒューモリストとは言えなう」(‘a great jester, not a great humourist’)と言っている。金之助はこの句を利用したのである。⁽¹¹⁾

しかし、サツカレイのスターン評価は、今日まで殆ど省みられることの無くなったもので、ただヴィクトリア朝期のスターンの低い評価を代表するものとしての存在価値を持つのみと言ってよい。十九世紀におけるスターン批評は、主として作品のもつわいせつきに対する道徳的反発と、ウォルポールやバイロンの寸言に見るようなゴシップ性、それに小説作法上の問題としての、バートンやラブレードからの剽窃に対する無理解などのために概ね低調であった。本格的な伝記ですら、パーシー・フィッツジェラルドによる二巻本の伝記がやっと一八六四年になって出た程度である。⁽¹²⁾

金之助が『トリストラム、シャンデー』を書いた一八九七年(論文の脱稿が二月九日。論の構想は恐らく前年頃

からあったであろう)を区切りとして見たばあい、それまでに出ていた主要なスターン研究は次のようなものである。

ウォルター・スコット『スターン回想』(Memoir of Sterne) 一八二三年⁽¹³⁾

S・T・コウルリッジ『文学的遺稿集』(Literary Remains) 第五巻 一八三六年⁽¹⁴⁾

サッカレイの諧謔作家論 一八五三年

フィッツジェラルドの伝記 一八六四年

レズリー・ステイーヴン『書齋での数時間』(Hours in a Library) 第三巻 一八七九年⁽¹⁵⁾

H・D・トレイル『スターン』(英国文人叢書シリーズ) 一八八二年⁽¹⁶⁾

西洋におけるスターン研究が質量ともに本格化するには二十世紀を待たねばならない。今世紀のスターン再評価の先鞭を着けたのは右に挙げたレズリー・ステイーヴンの娘、ヴァージニア・ウルフで、彼女の『センチメンタル・ジャーニー』(ワールド・クラシックス版)序文が一九二八年の初出であるから、二十世紀も四半世紀を過ぎてからの動きである。

このような研究上の流れから見ると、金之助のスターン論はいまだヴィクトリアニズムの抑圧下にあった批評の影響を間接的にせよ受けていたと言えることができる。これは時代的制約としてやむを得ないことであった。しかしながら、こうした研究資料の少なき、詳細な注釈本もないような条件下にあって、金之助のテキスト理解力の広大さと緻密な読み、そして関心の広さというものには真に驚くべきものがあると言わなければならない。次の後続の

一節も彼の関心の広さを示す一例であろう。

「兎に角四十六歳の頽齡を以て始めて文壇に旗幟を翻して、在來の小説に一生面を開き、さしまね靡いで風靡する所は、英にては「マッケンヂー」の「マン、オフ、フヒーリング」となり、獨乙にては「ヒツペル」の「レーベンスロイフへ」となり、今に至つて「センチメンタル」派の名を歴史上に留めたるは、假令百世の大家ならざるも亦一代の豪傑なるべし」

「マッケンヂー」即ちHenry Mackenzie (一七四五—一八三二)の*The Man of Feeling* (一七七一)年は、スターンの「脱線」の小説技法を模倣して「感情の人」タイプを描いた「センシビリティの文学」であるが、スターンのスケールの大きさに比肩しうるものではないというのが今日の評価である。⁽¹⁷⁾ また「ヒツペル」Hippel (一七四一—一九六)も、諷刺とヒューマーを特徴とする作家で、ジャン・パウルやスターンの影響を強く受けたといわれているが、今日では殆ど取り上げられることはない。金之助はセンチメンタルリズム文学のこうした限界を「歴史上に留めたる」という表現で暗示しているのである。

スターン文学が後世の文学者に与えたインパクトには二つの要素が考えられる。一つは、『トリストラム・シャンデイ』にみる驚くべき「機智」^{ワット}の魅力であり、もう一つは、『センチメンタル・ジャーニー』にみる「情感」主体のセンチメンタリズムのそれである。そして、前者のスターンの「機智」^{ワット}の要素は、スターン本人をもつて最後とする知的伝統であった(D・W・ジェファスンのいわゆる「ライニッド・ワット博学の才人の伝統」⁽¹⁸⁾)といわれる。ところで、後者のいわば「感性」の要素が時代の変化を受けやすかつたとすれば、前者の「知性」の要素は、スターンの場合あまりにも

極端で模倣者や亜流の存在を拒否するものであったと言える。このことが、金之助の、「百世の大家ならざる」という評価の意味合いであろう。金之助自身は後年（漱石として）『吾輩は猫である』で『トリストラム・シャンデー』の「スラウケンベルギウスの（巨大な鼻の）物語」（第三、IV巻）からアイデアを借りて「金田夫人」を造型したが、自らスターンの亜流となる心算ではなかったであろう。

〔A〕の(3)は、スターンの『説教集』と『トリストラム・シャンデー』を比較する⁽¹⁹⁾。金之助は『説教集』について、「是は單に其言行相背馳して有難からぬ人物なる事を後世に傳ふるの媒となる」のみである故に、「固より彼を傳ふる所にあらず」と否定的評価を下しているが、これは冒頭の、「最も坊主らしからざる人物」という評を受けて下した、いささか乱暴な断定であろう。今日スターンの『説教集』の評価は、ハモンドの徹底した調査研究⁽²⁰⁾によって従来より欠点とされた、他の説教家からの剽窃の問題もスターンの創造性の面から克服され、面目を一新している。『説教集』の出版当時の評判も『トリストラム・シャンデー』の名声の下にそれほど悪かった訳ではない。

ところで金之助は、スターンの「人物」と「作品」を統合する印象として、次に、「怪癖放縱にして病的神経質なる」と言う。「怪癖放縱」は別として、「病的神経質なる」部分は少しくは金之助の内実にふれた表現ではあるまいか。「ゆううつつの巨匠」といわれたスターンに対する親近性が右の言葉に象徴されているように思われる。スターンの「笑いの文学」が、作家の「病的神経質なる」内面によって支えられている。このような関係を見抜いた上で、金之助は次のような表現を行なっているのである。

「『シャンデー』程人を馬鹿にしたる小説なく、「シャンデー」程道化たるはなく、「シャンデー」程人を泣か

しめ人を笑はしめんとするはなし」

これを受けて(B) (第④段落)の部分は、作品の内容にふれつつ全体の構成について述べる。作品の原題が、『トリストラム、シャンドン』傳及び其意見』*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*とあるからには、読者は主人公が「トリストラム」であることを期待するであろうが、「中々降誕出現の場合に至らざるのみならず、漸く出産したかと思へば、話緒は突然九十度の角度を以て轉振すること一番」、あちらこちらと引きまわされ、「野ともいはず山ともいはず追ひ立てらるゝ苦しさ」を味わう。主人公のいない小説など面白い筈もない。サッカレイの『虚栄の市』*Vanity Fair* (一八四七—四八年)でさえ「終始貫通せる脈絡」があるのに、この作品はどうかと言つて、次の有名な一節に至る。

「單に主人公なきのみならず、又結構なし、無始無終なり、尾か頭か心元なき事海風の如し、彼自ら公言すらく、われ何の爲に之を書するか、須らく之を吾等に問へ、われ筆を使ふにあらず、筆われを使ふなり」と

「海風」は金之助が俳句にも用いるなど、彼の好みのイメージであるが、⁽²¹⁾英国の研究者たちが『トリストラム・シャンドン』全体の混乱の印象を形容するのに、「⁽²²⁾「*jūtamase*」「*farrago*」や「とりとめなき長話」「*rigmarole*」や「⁽²³⁾煮のシチュー」「*galimaufry*」あるいは「寄せ集め料理」「*salmagundi*」⁽²⁴⁾と⁽²⁵⁾主⁽²⁶⁾に一風変わった「料理」のイメージを使うのに比べると、金之助の捉え方は形象上の可笑し味も付加されてヒューマラスである。

この段落では主要登場人物も紹介される。トリストラムの父親ウォルター、トビー叔父、ヨリック牧師、ウオドマン未亡人、等である。このうち、トビー叔父を説明して、「⁽²⁷⁾リー、ハント」のいわゆる親切なる乳汁の精分もて

作り出されたる「トロー」と言ふのは Leigh Hunt の『ウィットとユーモア論』*Essay on Wit and Humour* (一八四六年) 中の 'quintessence of the milk of human kindness' を使ったのである。⁽²³⁾ この段落の終わりで金之助は西洋の「道化」を持ち出して、「シャンデー」は此道化者の服装にして、道化者自身は「スターン」なるべし」と興味深い主体的判断を示している。

〔C〕の部分(段落⑤～⑥)では、「雑談」即ち「脱線」'digression'の技法と、その例として、「スラウケンベルギウスの話」(第Ⅲ、Ⅳ巻)、「ル・フィーヴァアの物語」(第Ⅵ巻第6～10章)、そして「フュータトリアスと焼き栗のこっけい話」(第Ⅳ巻第27～28章)を紹介し、スターンの方法が、厳肅さというものを何より嫌う「ヨリック牧師」の「乱調子なる」道化的性格に反映されていると説く。ちなみにヨリックは、『ハムレット』の「墓掘人の場」に登場(?)する「死んだ道化」の名であり、スターンはこれを愛好して、『トリストラム・シャンディ』の中では牧師ヨリックを死なせたり生き返らせたりしている。

〔D〕の部分(第⑦～⑰段落)は、作品の喜劇的要素を細かく七つに分けて分析したところで、この論文の中心をなしている。

第⑧段落は、「笑ふ可き事」の例として、「出来得べからざる事を平氣な顔色にて叙述する」点を挙げる。トリム伍長がヨリック牧師の説教を読む時の上体の傾け方を「八十五度半」と説明する場面(第Ⅱ巻第17章)の微細に過ぎる描写である。

第⑨段落では、無用のアルファベットを羅列するこっけいさについて述べる。その理由は、「奇を好む著者の外何

一人も推測できない」とつき放している。この方法は喜劇の手法と同時に諷刺の方法として用いられるものである。第⑩段落は、小説構成上の常識の欠乏について。作中に白紙の章をはさんで独立の章立てとする（第IV巻第24章）、その非常識をジョン・ロック等の「タブラ・ラサ（白紙）」、「心」説を引き合いに出して、このような奇矯さはスターンに始まってスターンで終わるであろうと説く。

第⑪～⑫段落では、白紙の頁と同様、視覚に訴える方法としてスターンが直線と曲線をじつさいの頁に生かす、その着想の奇抜さを指摘する。スターンがこうした方法を取るのには、言辞の足りない点を補うためであるという。「トリストラム・シャンディ」の印刷上の風変わりさは、この他にも、ヨリックの死を悼むというつもりで二頁すべてを真っ黒につぶした第I巻第12章や、作品全体の「ごちゃごちゃした象徴」として「墨流し模様」の頁を入れた第III巻第36章の例がある。いずれも言語表現の可能性とその限界についてのスターンの基本的認識をあきらかに示すものである。

第⑬段落は、ウォルター・シャンディの奇想が、「真に読者をして微笑せしむべく、絶倒せしむべく、満案の嘔を噴せしむ」べきものであるとして、ウォルター独自の「姓名論」を展開する場面（第I巻第19章）と、古来の産婆学を持ち出して「帝王切開」法をお産の近いシャンディ夫人に提案して拒絶される話（第II巻第19章）を例に示す。人の姓名のうち、「ジャック」、「ディック」、「トム」という名は可もなく不可もない「中性」のもので、「アンドルー」はゼロ以下、「ニック」は「悪魔」である。しかし、中でも「最も嫌ふべく賤しむべき名」は「トリストラム」であるという。この名が召使いの不注意のために主人公の名前となったのである。ウォルターの理論と現実のギャ

ツプが笑うべきものであることはいうまでもない。

第⑭～⑯段落では、ウォルターの「学者ぶり」の徹底さが「死」の主題と対比させられる個所（第V巻第3章）と、トビー叔父の念の入った「築城学の研究」（第II巻第3章）の話を取り上げ、「順良なる無邪氣なる」トビーの「科学的思想」とウォルターの「哲学的観念」とが、「相反映」して「此弟にして此兄あり雙絶」の関係にあると指摘する。第V巻第3章の主題としての、トリストラムの兄「ポビー」の異郷での死は、ウォルターの縦横無尽のペダンティックな議論の向こうに追いやられて消失してしまう具合であるが、この「死」の主題はじつは『トリストラム・シャンデー』全体に深い基調音として響いているものである。「出産」と「命名」と「死」の主題は、『トリストラム・シャンデー』のヒューマーの世界を支える三位一体トリニティというべきであつて、金之助の記述もこのあたりで質量ともに充実して熱がこもっている。

第⑰段落は、スターンのヒューマーのもう一つの側面、即ち、「野卑に流れて上品ならざる」面を表わす例として、「フュータトリーアスと焼き栗」事件を再び取り上げる。焼き栗の一個が、仲間との議論に熱中するフュータトリーアスのズボンの穴に躍り込んで、本人を心理的にも肉体的にも大混乱に陥れたこっけい極まる顛末である。金之助は、「此滑稽は野卑なれども無邪氣にして頗る面白し」とよろこび、「膝栗毛七變人杯よりは反つて読みよき心地す、蓋し「スターン」集中に在つて諧謔の佳なるものか」と大いに評価している。金之助自身のセンス・オブ・ヒューマーにふれる要素を持ったエピソードとして注目される。

〔E〕の部分（第⑱～⑲段落）は、金之助が、「余が最も感じたるは、「ヨリック」法印遷化の段なり」と言つて

紹介する所で、スターンのヒューマーとセンチメンタリズムが独特の融合を示す場面である(第I巻第12章)。いまわの際に至ったヨリックは、親友のユージニアス(スターンの親友、ジョン・ホール・ステイヴンソンがモデル)に向かつて、自分は敵どもに攻撃されたために「頭の形」が変わってしまったので、仮に回復して「大僧正の冠」が霰あられのようにふってもこの頭に合うものは無いのだと嘆く。友人は去り、ヨリックは今は、「ああ、あわれ、ヨリック!」という墓碑銘の下に眠っているという。笑いと涙の要素が渾然となった、スターン独自のセンチメンタリズムが発揮される場である。

ところで、このヨリックの臨終の場を描くのに「異様の筆法を用ゐて曰く」として紹介する第⑩段落の引用は、金之助の記憶違いで、「天命は忽ちにして復去りぬ、霧は来りぬ、脈は鼓動しぬ、止まりぬ、又始まりぬ、激しぬ、再び止まりぬ、動きぬ、後は? 書くまじ」という箇所は、例の「ル・フィーヴァーの物語」の最終場面(第VI巻第10章)である。ル・フィーヴァーは陸軍中尉で、アイルランドからフランダースの連隊に加わる途中で病気に罹り、トビー叔父の村の宿屋で最後を迎える。そのさいトビー叔父やトリム伍長が、この中尉と、同行している息子に対して満腔の同情と慈悲を示す。それは、純粋なセンチメンタリズムがみられる場である。しかし、その最後の情景を右のような「異様の筆法」を用いて、そのセンチメンタリズムを破壊してしまうのである。このような「異化」的效果はヨリックの臨終の場にもうかがわれるもので、それ故に金之助は二つの場面を混同してしまったのであろう。

〔F〕の部分(第⑳～㉔段落)は、主にスターンの文体論であるが、それに入る前に、先述〔A〕の(3)した「病

的「神経質」なもう一つの例をトビー叔父と一匹の蠅の話（第II巻第12章）に求めて、「蠅を愛して母に及ばざる此坊主の脳髓ほど、病的神経質なるはあらじ」と念を押す。

文体についての議論は第②段落からで、マッソンMassonとトレイルの説を援用して、金之助自身の説を次のようにまとめる。

「實際「スターン」の文章は錯雑なると同時に明快に、快癖なると共に流麗なり、單に一句を以て一頁を填めけるかと思へば、一行の中に數句を排列し、時としては強て人を動かさんと力め、時としては又餘り無頓着に書き流す」

スターンの文体を「会話体的」と見て、読者に対する作者の盛んな呼びかけの調子を説明する捉え方もあるが、²⁴金之助の捉え方のダイナミズムもこれと比べてそんな色はない。

この後、「長句法」と「短句法」の例を示し、さらに「擬人法」の例として「カメル」の詩から二行を引き、擬人法は「厭味あるもの」で、「妄りに使ふべからざる者」と評している。金之助の文章心得として読めるが、ここにいふ「カメル」はThomas Campbell（一七七〇—一八四四）のこと。引用の詩は、フランス革命の影響を受けて自由思想を説いた「希望のよろこび」“The Pleasures of Hope”（一七九九年）からで、引用二行目のコシチューシコKosciuskoはポーランドの愛国主義者Thaddeus Kosciusko（一七四六—一八一七）である。²⁵金之助の関心の広がりはこの所にも及んでいる。

第③段落は、トリストラム出産のさいスロップ医師が器械を使ったためにトリストラムの鼻を「ペしゃんこ」に

してしまふ話（第三卷第27く29章）で、悲嘆にくれたウォルターがベッドに倒れ込む様子をスローモーション式に描く箇所を「冗漫」の文章の例として取り上げる。「鼻」の象徴作用は「スラウケンベルギウスの物語」と同様この箇所にも働いているであろうが、ウォルターの肢体、顔の表情を描くさいの微妙さ精緻さは、スターンの喜劇意識の横溢であると同時に、スターンの「時間」意識を示してもいる。

第②段落は、剽窃の問題を取り上げるが、しかし「説くべき必要」があつても、「参考の書籍なければ略しぬ」とそつけない。このあたり金之助の筆はいささか倉皇としているが、時代の状況を考えればやむを得ないことであつたらう。

『トリストラム・シャンディ』の中には龐大な過去の文学の伝統が蓄積されているので、剽窃、借用、引用の区別は今日もなお容易な問題ではない。今日もつとも詳しい校訂と注釈を施した『トリストラム・シャンディ』のテクストは、本書の「序に代えて」でも紹介したように三巻本（内一巻が注釈）のフロリダ版（一九七八、八四年）であるが、右の問題にかかわる注釈作業はさらに継続されている現状であれば、金之助の位置とわれわれの位置の間にそれほどの懸隔はないとしなければならぬであらう。

〔G〕の結語（第⑤段落）は、金之助の、「笑ふ可く泣く可く奇妙なる」スターンとの戯れである。

「スターン」死して墓木已に拱す百五十年の後日本人某なる者あり其著作を批評して物數奇にも之を讀書社會に紹介したりと聞かば彼は泣べきか將た笑ふ可きか」

金之助は、自分がこの作品を取り上げた動機らしいものを、「物數奇にも」と茶化して言っているが、恐らくその

言葉以上に彼は、スターンの途方もない自由な精神に対する共感を得ていたであろう。ヨリックに対する共鳴はこの点、示唆的である。金之助はこのエッセイを書くことで、自らのスターンとの同質性を示したと言うことができる。

三、『トリストラム、シャンデー』以後

金之助は『トリストラム、シャンデー』を書いて、なお二篇の英文学関連の著作を発表し、明治三十三年（一九〇〇）から足かけ三年の英国留学を果たす。帰国後、東大文学部の講師となつて行なつた講義が、「英文学形式論」、「英文学概説」、そして「十八世紀英文学」である。この三番目の講義が、『文学評論』の題で出版されたものであることはいうまでもない。こうした流れの中で見る時、『文学評論』中のスウィフト論、ポープ論は、金之助のスターン論の、方法論的進化及び深化を示したもののように思われる。逆にいえば、金之助の関心は、スターンよりさらに十八世紀英文学史を遡つて行つたのである。⁽²⁶⁾

しかし、周知のように『文学評論』の記述は、デフォー論まで進んだところで中止され、ついにスターンまで進む（あるいは、回帰する）ことはなかった。英文学者夏目金之助の問題意識はデフォーで途切れ、代りに小説家夏目漱石が後を引き受けたと言つてよいかも知れない。

ところで、漱石が引き受けたスターン像は、『吾輩は猫である』の「鼻」のアイデアや「脱線話」や奇抜な議論よりはむしろ、『草枕』の次の一節によく表わされているように思われる。

『トリストラム・シャンデー』という書物のなかに、この書物ほど神の御覚召おぼめじに叶かうた書き方はないとある。最初の一句はともかくも自力で綴つづる。あとはひたすらに神を念じて、筆の動くに任せる。何をかくか自分には無論見当が付かぬ。かく者は自己であるが、かく事は神の事である。従って責任は著者にはないそうだ。余が散歩もまたこの流儀を汲くんだ、無責任の散歩である。ただ神を頼まぬだけが一層の無責任である。スターンは自分の責任を免れると同時にこれを在天の神に嫁した。引き受けてくれる神を持たぬ余は遂ついにこれを泥溝どぼの中に棄てた。」(十一)

『トリストラム、シャンデー』を書いた時の金之助は、「神」の存在をこのように意識することはなかった。『草枕』の漱石は、「余」の姿の中に、「引き受けてくれる神を持たぬ」自己を意識せざるを得ない。金之助の『トリストラム、シャンデー』は、いわばスターンとの同質性を確認する作業だったが、『草枕』の漱石は、スターンの「流儀を汲くん」でもめて、「一層の無責任」な場所まで来てしまったことを自覚せざるを得ない。その「無責任の散歩」は、もはや英文学者夏目金之助が楽しめるようなものではなかったのである。

注

(一) この時期の「金之助の周囲」については、岡三郎『夏目漱石研究』第一巻「意識と材源」(国文社、一九八一年)参照。

- (2) 『トリストラム、シャンデー』という表記法は、岩波版漱石全集（昭和三十二年、全三十四巻中第二十二巻）初期の文章）に拠った。外国人名をかぎ括弧で囲む方法も同版に拠る。
- (3) 三好行雄編『漱石書簡集』（岩波文庫、一九九〇年）に拠る。書簡については以下同様。
- (4) 半藤一利『漱石先生ぞな、もし』（文藝春秋、一九九三年）「そでふりあふも……」四六頁。
- (5) 注(2)の岩波版漱石全集、解説。
- (6) Alan B. Howes, ed., *Sterne: The Critical Heritage* (London and Boston: Routledge and Kegan Paul, 1974), pp. 379—80; No. 125, 'Carlyle on Sterne.' Cf. Alan B. Howes, *Yorick and the Critics: Sterne's Reputation in England, 1760—1868* (Hamden, Connecticut: Archon Books, 1971), pp. 124—25.
- (7) Cf. *The Critical Heritage*, pp. 422—35.
- (8) 例えば、明治二十八年十二月十八日の正岡子規宛書簡に、「小生は教育上性質上家内のものと気風の合はぬは昔しよりの事にて、小児の時分よりドメスチック・ハッピーネスなどいふ言は度外（だがい）に付しをり候へば今更ほしくも無之（なれど）候」とある。中根鏡との結婚話が進んでいる頃の書簡である。
- (9) 『漱石文庫目録』（東北大学附属図書館）によれば、漱石所蔵の『センチメンタル・ジャーニー』のテキストは次のものである。
 [No. 536] Sterne (L.) *A Sentimental Journey through France and Italy*. Lond. Dent, 1899. 164p. 24. (Temple Classics)
 金之助が『トリストラム、シャンデー』を発表した年が一八九七年であるから、その時点では金之助は『センチメンタル・ジャーニー』を読んでいなかったということになろう。

一 (10) Cf. *Yorick and the Critics*, pp. 89—90.

(11) Cf. *The Critical Heritage*, p. 27. なお、サッカレインの *English Humourists of the Eighteenth Century* 及「漱石文庫」には所載をなしていない。

(12) Percy Fitzgerald, *The Life of Laurence Sterne* 及「サッカレインに反抗して書かれた最初のスターン伝」。スターン伝の記の標準的研究書については「二十世紀に入って」W. L. Cross, *The Life and Times of Laurence Sterne* (1909; 1925; 1929; 1967) を出だす。本書「序だ代えへ」でも述べたように、今日では Arthur H. Cash の訳註 *Laurence Sterne: The Early and Middle Years* (1975) 及びその続編 *Laurence Sterne: The Later Years* (1986) が最良の伝記的研究である。ちなみに Fitzgerald のスターン伝は「漱石文庫」には入っていない。

(13) 普及版の *Lives of the Novelists* であるが、金之助が読んだのは「漱石文庫」中の次のものである。
 (No. 480) Scott (Sir W.) *Lives of Eminent Novelists and Dramatists*. Lond. Warne, n. d. 617p. 16°. (Chandos Classics)

(14) 「漱石文庫」中のロウレンツァン資料には次のものである。

[No. 131] Coleridge (S. T.) *Lectures and Notes on Shakespeare and Other English Poets*. Ed. T. Ashe. Lond. Bell, 1890. 552p. 16°. (Bohn's Standard Library)

[No. 132] Coleridge (S. T.) *Passages from the Prose and Table Talk of Coleridge*. Ed. W. a Prefatory Note by W. H. Dircks. Lond. Scott, 1894. 261p. 16°. (Scott Library)

(15) 「漱石文庫」中のレスリー・ステイブリン資料には次のものがあるが、出版年代から見て金之助がスターン論のためにこれを読んだとは考えられぬ。

- [No. 535] Stephen (L.) *English Literature and Society in Eighteenth Century*. Lond. Duckworth, 1904. 224p. 12.
- (16) トレイルの研究のことは、第②段落で言及されるが、「漱石文庫」中には見当たらない。同段落をトレイルと比較して言及されるマッソンの資料は次のものと考えられる。
- [No. 375] Masson (D.) *British Novelists and Their Styles*. Camb. Macmillan, 1859. 308p. 12.
- (17) 「漱石文庫」中のマッソンの「テクスト」は次のものである。
- [No. 363] Mackenzie (H.) *The Man of Feeling*. Lond. Cassell, 1886. 191p. 24. (Cassell's National Library)
- (18) D. W. Jefferson, "Tristram Shandy and the Tradition of Learned Wit," *Essays in Criticism*, 1 (1951), pp. 225—48. 頁在は、Norton版 *Tristram Shandy* の中に入っている。
- (19) 「漱石文庫」中にはスターンの『説教集』のテクストはない。「トリストラム・シャンデー」のテクストは、次の二種がある。
- [No. 537] Sterne (L.) *The Life and Opinions of Tristram Shandy*. Phil. Lippincott, 1858. 271p. 8.
- [No. 538] Sterne (L.) *The Life and Opinions of Tristram Shandy*. Lond. Routledge, 1891. 322p. 16. (Morley's Universal Library)
- (20) Lansing V. D. H. Hammond, *Laurence Sterne's "Sermons of Mr. Yorick."* (Yale Studies in English, Vol. 108) New Haven: Yale Univ. Press, 1948; reprinted 1970.
- (21) 明治三十二年五月に長女筆子が誕生した時の句に、「安々と海鼠の如き子を生めり」というのがある。『夏目漱石事典』(學燈社) 二二二頁参照。
- (22) Henri Fluchère, *Laurence Sterne: From Tristram to Yorick*, tr. B. Bray (London: Oxford Univ. Press, 1965), pp.

附論

- (23) *Yorick and the Critics*, pp. 141—42. 「漱石文庫」中には次のものがある。
[No. 284] Hunt (L.) *Essays by Leigh Hunt*; with introduction and notes by A. Symons. Lond. Scott, 1888. 314p.
16°. (Camelot Series)
- (24) Cf. Eugene Hnatko, "Sterne's Conversational Style," *The Winged Skull*, ed. A. H. Cash and J. M. Stedmond (London: Methuen, 1971); Louis T. Milic, "Observations on Conversational Style," *English Writers of the Eighteenth Century*, ed. John H. Muddendorf (New York and London: Columbia Univ. Press, 1971).
- (25) 金之助の引用 "Hope for a season bade the world farewell./And Freedom shrieked as Kosciusko fell" は "The Pleasures of Hope" の二二三—四行。全部が五三〇行の長詩でもなく、Campbell の詩集は「漱石文庫」目録に記載されていない。 Cf. *Selections from Campbell*, ed. with introduction and notes by W. T. Webb (London: Macmillan, 1902).
- (26) 漱石と十八世紀英文学の関係については次のような評言が参考になる。「漱石は、ロマン主義的感情優位の文学よりも、最初から、非常に理性的、合理的な合理精神の表出である十八世紀文学に強くひかれた形迹が著しい。」(中野好夫、漱石とイギリス文学) 日本近代文学館編『日本近代文学と外国文学』昭和四十四年)

トマス・パッチの絵のこと

ローレンス・スターンという名前には、その作家的名声を確立した十八世紀の当時から、すでに本来的に、ある定義がたいも、やの、やのようなものがまつわりついでいるようだ。ある時はその名は^{フル}道化^{フル}であり、^{スカウツドレル}放蕩者^{フル}であり、^{マツテイ}香具師^{マツテイ}であり、またある時は^{ピカロ}頭腦のピカロ^{フル}（B・H・レーマン）であり、^{ロリー}英国のラブレ^{フル}（H・ウォルポール）であり、あるいは^{サー・ウォルター・ロリー}永遠の驚き^{フル}（サー・ウォルター・ロリー）であつたりする。それらのも、やの中から、しかしスターンのアイデンティティを探し出そうとすればするほど、彼はさらにその奥へと姿を隠し、我々の眼前から遁走する。残された我々は笑いのものにされ、笑っているのはスターン一人になる。一体この、スターンの捉え難さとは何か？ 仮にこの捉え難きものを^{ヒューマー}ヒューマー^{フル}と呼んでみるとどうか、というのが、スターン文学の解明への第一歩である。その際問題は、ヒューマーそれ自体の定義よりむしろ、それを成り立たしめてい

る本質的な要素あるいは基本的条件とは何かということであつて、ハヒューモリストVの具体的なイメージはそこにおいてこそ得られよう。そうして明らかにされたヒューモリストの存在の様態から、逆にヒューマーとは何か、恐らく帰結されるに違いない。

『トラストラム・シャンデイ』の場合、ヒューマーはセンチメンタリズムと笑いという形を取るのが大まかな特徴である。間断するところのない笑いの感覚でもって書かれた『トリストラム・シャンデイ』には、哀感・涙・諷刺・皮肉・洒落・地口・性的なほのめかし等の要素がもちろん含まれており、全体として狂^{エクストラヴァガザ}劇ふうのヒューマーの世界がそこに現出しているが、その特質はやはりセンチメンタリズムと笑いの文学たることであるといえる。ところでこの、近代小説の概念を徹底的に無視したかに見える『トリストラム・シャンデイ』の喜劇的世界をスターンは何によつて支えたかと言へば、ここに『トリストラム・シャンデイ』のヒューマー感覚を本質的に支えているハシヤンデイイズムVの問題が表われてくる。スターンのセンチメンタリズムも笑いも、そして他のヒューマーの要素も、さらには彼の小説技法も文体も、皆この、いわばスターン流の笑いの哲学によつて統制されている。これは、『センチメンタル・ジャーニー』についてヴァージニア・ウルフが見通した「何か根本的に哲学的な態度」に通じる、スターンの根本的想像力による一つのモラルとも言い得るものである。これについてはあとで再びふれるとして、先の、センチメンタリズムと笑いという喜劇的特質の問題をまとめておこう。

スターンが使うハセンチメンタルVという言葉は、H・N・フェアチャイルドの『英詩における宗教的傾向』（一九五八年）に詳説されているような、十八世紀初期の宗教的色合いをすでに払拭されて、いわば感情そのものの美

を求める傾向を有している。彼のセンチメンタリズムとは、「洗練され、高められた感情」の発露であり、「繊細な感覚や感情を敏感に感じとること……どんなにささいな刺激に対してもよるこんで素早く反応すること」(S・H・モンク)である。それ故そこには、スターンの過敏なまでの意識のゆきわたらせ方があり、そこからスターン文学の特徴である、道化的な^{セルフコンシャス、ブレイ}自己意識のあそびの^{セルフ}様相が表われる可能性がある。しかし現代的な意味での「感傷」「煽情」のニュアンスはここにはない。ところで『トリストラム』におけるセンチメンタリズムには、右に述べた「道化的様相」とも関連があるが、その純粋性とは対立的に、もう一つの位相が表われる。

つまり、スターンのセンチメンタリズムには二面性がある。一つはレズリ・ステイヴンの言うように、「純粋で単純」な、まじめな慈愛と胸あたたまる感動につながるヒューマードであり、もう一つは、そうしたまじめな感情交流の場面をぶち壊してしまう、不まじめな、ベイススによるヒューマードである。後者にはいふ迄もなく笑いが意図されている。これらの二面性が表われる最もいい例は、第六巻の「ル・フィーヴァーの物語」のエピソードである。一人息子を連れたル・フィーヴァーという軍人が死の床についている。人情家のトウビーとトリム伍長がこれに同情し、心からの手厚い看護の配慮をしてやっている。ここでトウビーとトリム伍長が示すあたたかい^{フエロウ、フィーリッシュ}同朋愛は、反論しようのない人情美の型をそなえていると言える。ところが、このエピソードの最後の愁嘆場に来ると趣が違ってくる。スターンのペン、つまり話者トリストラムのおしゃべりが場面の前景に出しゃばり、その場を台無しにし、ル・フィーヴァーの死を、笑うべき^{アップサイディ}ばかばかしさの効果に終わらせてしまうのである。そのル・フィーヴァーの臨終の場面を引用しよう。今やこのあわれな軍人は息をひきとるところである。トリストラムは単なる同情

の眼を捨てて、死の鉄槌によって弱まりゆくル・フィーヴァーの肉体の細部を執ように見ている。この軍人はもはや同情の対象の人格ではなく、トリストラムの語りによって「ピン止め」にされた物体である。

「生気はあつという間にふたたび引きはじめました——眼のもやも、もとにもどりました——脈がみだれました——とまりました——また打ちました——トントントンと打って——またとまりました——また打った——またとまった——もつと書きつづけましょうか？——へいえ、もう結構です」(第六卷第十章)

この最後の語りのナンセンスは、死の嚴肅に対する笑いの攻撃であるといえよう。死という重大事がひやかされ、ばかばかしい笑いの具に格下げされている。つまり、ル・フィーヴァーのエピソードを特色づける、涙とペイソスのやさしい情感に満ちた場面の背後から、スターンはまるで、その場全体を破壊し、無に帰させてしまうかのよう、笑いとナンセンスの道化的表情をのぞかせるのである。

じつはここに、本質的な意味でのヒューマーというものがあるといえる。というのも、かつてコウルリツジが見抜いたように、あるいはまたスターンの異国の後継者、ジャン・パウル・リヒターが見ていたように、ヒューモリストとは、善も悪も、不条理も美德も、人間の価値としては等価であると思なす人間のことであり、笑いと、無限の視点からこれらの対立物を破壊することによって生じてくるものであるという認識にこそ、ヒューマーについての最も深い捉え方があるのであり、右の例にあげたエピソードの最後においても、死という重大グレイトなものが、ナン

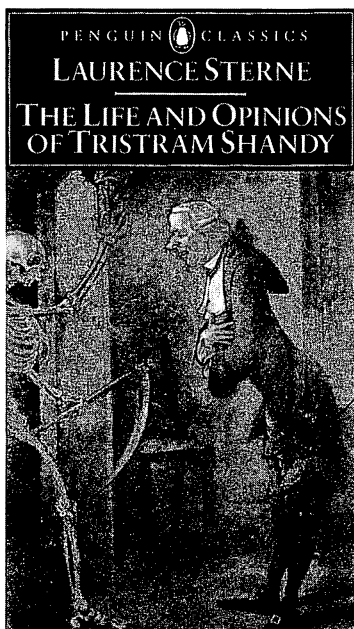
センスな語り口という一見^{リットル}ささいなレトリックで茶化されることによつて、その大なるものと小なるものとの対立の間隙から、他ならぬ笑いというものが突出して来ているからである。この時スターンにとつて大事なことは、人間の宿命である死についての想念が、∧無限∨の位置から、ナンセンスなレトリックとともに破壊され、無に帰せられる——それ故スターンのレトリックは、死の観念の破壊、あるいは死のこわばりからの解放のための方法だった——ということである。何故なら、死と時間の急迫の固着的観念こそ、彼が破壊したかった当のものであるからである。

ところで、スターンのセンチメンタリズムと笑いは、前者の一部が後者の方へ進んでゆくという関係を有している。スターンのヒューマーにこうした方向性が見られるということは、先述したシャンディイズムと、ル・フィーヴァーやトリストラムの兄、ボビーの死（第五巻）に関連するスターン自身の死意^{死意}の問題とに関わってくること^{こと}がらである。つまり、センチメンタリズムと笑いに集約されるスターンのヒューマー意識の根底にあるのがシャンディイズムであり、シャンディイズムとは、トリストラムが下すその定義（第四巻第三十二章）を約言すれば、死のこわばりを笑いの効果によつてときほぐし、生の活動をその生理的な段階においてまでも確認しようとする喜劇的精神、であるからである。あるいは、笑いというものを自己の生の基本的あり様に対して位置づけようとする精神、と言いかえてもよい。いずれにしろ、この精神の背後には、スターンの永いオプセッションであった死意識および肉体の危機意識、そしてそれに連関する時間意識がある。生来の蒲柳の質と、大学卒業の年に始まり、スターンが『トリストラム・シャンディ』の作家になつて以来、頻発するようになった咯血——彼は「死神にノックされ

ながら」ものを書いていたし、四十八歳の年の暮には妻子へ遺言状を書いてさえている——と、晩年の狂恋のいきさつをつづつた『イライザに寄せる日記』に見える熱病等が、家庭的な不和や現実における不如意と相俟つて、終生彼を悩ませた。そのような精神的・肉体的現実と、『トリストラム・シャンデイ』において展開される、センチメンタリズムと笑いによる世界とのあいだの距離の大きさを、我々は忘れない方がよい。現実にはあり得べくもないその距離こそ、しかしヒューモリスト、スターンを生みだした条件であるからである。そのへだたりこそ、一般化して言えば、「現実」と「言葉」との——「言葉」を扱うものにとつては、それ自体を断念する以外には恐らく永遠に埋め合わせのできぬ——へだたりに他ならないからである。恐らくこの距離を埋めようとして案出されたのが、スターンの場合、『トリストラム・シャンデイ』の喜劇的原理ともいえるシャンデイイズムなのである。それはたとえば『トリストラム・シャンデイ』第一巻のピットへの献辞にうかがえるような、笑いへの想像力として表われるところの、彼の全体を支える一種の生の原理でさえあつた。

結論的に言えば、スターンのヒューマー全体の根本のところ、献辞の中にみるところの、「人間が微笑をうかべるたびに、その分だけこのつかの間の人生には、何かサムシングが加えられる筈だ」というような笑いへの想像力が働き、それがシャンデイイズムというスターン流の笑いの哲学に至り、さらにそれが、センチメンタリズム・涙・洒落その他の現象となつて表われる、しかもこれらを裏打ちしているのは彼の死および時間の急迫の意識である、というのが、スターンのヒューマーの重層的世界の内容である。

ところでここに、『トリストラム・シャンデイ』に関する一枚の戯画を紹介したい。スターンのヒューマーの在り



方を端的に示し、しかも彼自身の生の基本的な、また固執的な条件をも見事に例証している絵である。その絵でもってスターンのヒューマールのすべてが表現されていると言う心算はないが、しかしその絵によってスターン文学におけるあそびと嚴肅、あるいはまじめと不まじめの共存のイメージを、ある程度決定づけられることは確かである。

その絵の作者は、スターンと同時代の英国の画家で、同じ『トリストラム・シャンデイ』のために二葉の挿画を描いてやったホガースに比べれば殆ど無名に等しい、トマス・パッチという、フィレンツェに永く住み、そこで死んだ男である。しかしその殆ど無名の画家の絵の方が、高名なホガースよりも深く、スターンのヒューマールを理解していたように見える。この男とスターンが出会ったのは唯の一度、スターンがイタリアに旅行した折、フィレン

ツェに立ち寄り、そこで全権大使をしていたサー・ホレス・マンと会った折のことである。パッチはマンの庇護を受けており、マンは友人ウォルポールにすすめられて『トリストラム・シャンデイ』第一巻刊行時より愛読していたので、マンを通じてパッチはスターンの名を知っていたであろう。あるいはパッチ自身、『トリストラム・シャンデイ』を読んでいたのではあるまいか。D・N・Bをみると、パッチ自身にも何か奇警なところが

あつて、彼はそのために教会当局の不興を買い、ローマからフィレンツェに逃げてきたとある。また彼は、フィレンツェに寄つた英国の著名人の戯画集を出版してゐる。こうしたところから、パッチの中に、スターンのヒューマーに対する共感があつたと推測できないことはない。スターンとパッチが実際にはどんなことを話したのかは分かつていない。ほんのゆきずりの出会いのような関係である。しかしそれをきっかけにして前頁のような絵が生まれた。題はいみじくも、「スターンと死神」である。

まず画全体は、暗い黄土色の色調でおさえられている。暗い部屋の扉が開いて、そこに骸骨（死神）が、右手に砂時計をさし出すようにかかげ、左手に大鎌（時の大鎌！）をつかんで浸入しようとしている。それに向かつて胸に両手をあて、腰を「八十五度半」ほどにも傾けて、全身黒っぽい僧衣を着た、やせて背の高い、鼻の長いスターンが、お引き取りを願うといった仕草で対面している。一見してグロテスクであり不気味なヒューマーがある。砂時計の砂は落ち切り、時間が切れていることを示している。いう迄もなくそこには、死と時間の強迫のテーマがある。

ところでW・L・クロスは、この絵のスターンの表情に驚愕と恐怖を読みとり、D・トムソンも、スターンが「忍耐づよい死神に対して、驚愕しながら立ち向かつてゐる」と見ている。そうとすればそれは、スターンの中のヒューモリストならざる真顔の部分を示したことになるであろうが、筆者にはそうとばかりは思えない。何故ならそれは、驚愕の表情であるにしては、不敵な面がまえであるからである。むしろスターンの方が死神を茶化し、それと和解し、なれ合つてゐるようにさえ思われる。そしてその方がヒューモリスト、スターンには似合つてゐる。しか

しこの絵に示された死と時間の強迫が、ヒューモリストの本質的条件であったことに変わりはないのだ。スターン自身はついにこの絵を見ずに終わったようだが、もし生前これを見ていたら何と言ったであろうか。

〔附論 三〕

『権争物語、あるいは夜番外套物語』——抄訳及び書誌的解題

〔権争物語〕

Ridiculum acri/Fortius et melius magnas plerumque secat Res.——笑いは、大事を円満に解決するに当たり、諷刺の辛辣なるに優る。⁽¹⁾

拝啓

先の手紙では、他に何もいい知らせがなかったものですから、最近私達の小さな村（*ヨークのこと）で起こった騒動のこともお伝えしたらと思つた次第でありました。すでに御承知の八黒いプラシ天の古い半ズボン⁽²⁾をめぐる騒動であります。この半ズボンを、教会庶務役員のジョン殿が、十年ほど以前のことと思いますが、われらの寺男にして犬追^{ドッグ・ワイルド}い役のトリムという男に譲ることを約束していたのであります。——ところでこのことについては貴殿は便りを下されて、貴殿自身一、二度ならず、このトリム先生の策士ぶりの一部始終をお知りになる機会

をお持ちになった由、——而も、どうしてこんな下らぬ、おまけにこんな無価値な野郎奴が、私がお伝えしましたような「大騒動」の原因となり得たのか驚きもしたし、真底想像もつかぬとのことでごさいますね。

ところで貴殿は、これ以上のことをお聞きになりたいとはつきりとは仰言ってはいませんが、私の話が貴殿の好奇心をそそってくれたことは十分に感じている次第。そこで、私の先の手紙でちよつと申し上げたのと同様の動機で、今回この事件の顛末を詳細かつ十分に、貴殿にお話し申し上げます。

しかしお話しを始めます前に、私達の間で起こったこの騒動のすべての真の原因について、私が貴殿に真相と違つたふうにご教授しております或る重要な点を、まず正しておきたいと思ひます。それは——この騒動というのは、私が前に述べましたように、△半ズボン▽の事件が原因だつたのではなく、その反対に、△半ズボン▽の事件はみな、この騒動がもとで起こつてきたことなものです。——このことを知つて貰うには、まずこの騒動の始まりは、庶務のジョンと寺男のトリムの間で起こつたのではなく、△教区牧師▽殿とこのトリムとの間で、△古い夜番外套▽⁽³⁾をめぐつて起こつたことを知つて貰わなくてはなりません。この△古外套▽、長年の間教会に掛けてあつたのですが、これこそトリムが自分のものにしなうと思つていたものでした。そしてトリムにしてみれば、それを冬用に仕立て直して彼の妻のためには△あつたかいペチコート▽に、自分のためには△ジャケット▽にしようとして家に持ち帰らなければ、どうしても満足出来なかつた訳でした。そこで、彼は哀調たつぷりに最大の卑下をもつて彼の尊師にこのことに同意をして呉れるよう頼み込んだのでした。

強い惻隱の情と称する人間の心理を支配する一原理は、寛大な精神を駆り立てて正当な行為の範囲を越えさせる

ものだとすることを、貴殿は良くお感じになっておられることですから、申し上げる必要ありませんが——じつは件の△教区牧師▽は、あやうく、まさにこの犯罪の名誉ある見せしめ者となるところだったのです。——と申しますのも、トリムが訴える△ペチコート▽——△あわれな女房▽——△あつたかい▽——△冬▽というような言葉がはつきりと先生の耳に入るや否や、先生、胸にぼつと火がついて熱くなり——トリムがその嘆願の終わりまでよう行かぬうちに△包み隠しのない心の広い紳士でありましたので、心の底からよろこんでその申し出を受け入れますよ、とトリムに返事をされたのでした。しかしねえ、トリム君、と先生が仰言るには、君も御承知の通り、私はまだこの教区の牧師として寺録にありついたらばかりの新米だし、教区に関する事柄についてはまったくの不案内者であるからして、君が私に頼んでいるこの夜番外套については何も知らんし、これまでそんなものを見たこともなかつた訳だからねえ。そういう訳でこれが君の言う目的にかなつたものになるのかどうか判断出来かねますがね。あるいはもしそれでうまくゆくとしても、じつさいはねえ、それを君に与えることが私の権限であるのかないのか分からんです。——それで君、一週間か十日ほど、私がこの件について少しく調べることが出来るまで待つておいて欲しいのですが。——それで、もし私にそうする権限があると分かれれば、私は君にこう言つてやるよ——おい君、例の外套が君の言つた倍ほどもあれば、君の奥さんは心おきなくそれからペチコートの分を取れるし、君もジヤケツの分が取れるぞ、とね。

ここで貴殿に次のことをお伝えしておく必要があります。即ち、この教区牧師はこの事件においてはトリムのために熱心に役に立つてやろうとしておられたのですが、それは正当にも私が彼自身の特質として申しました彼の寛

大な思いやりから出たことであるのみならず、また同時に別の動機からも出た行為でありました。つまり牧師殿の側人が留守の時には、トリムが時々やつておつて、じつさいには今も続けてやっている（彼は教会に出入りしていましたが、これらの理由をひつくるめて、この教区牧師はこの件に関して自分の力の及ぶ限りトリムの役に立とうと考えられた訳で、従つてあとやるべきことといえば、誰か他の人がそれに対する請求権を持つているのかどうか——あるいは、何しろそれは教会の中に誰も思い出せぬ程永いあいだ掛けられていましたので、それを引き下ろして、教区内にさわぎが持ち上がらないものかどうかを前もつて調べておくという配慮だけであつた訳です。しかしこうした調査こそトリムが心の中で恐れていたことでありました。——と申しますのもこの男、もし教区牧師殿がこの件について教区委員たちに一言でも言おうものなら、自分の計画が全部おじゃんになり果てようとはよくよく承知しておつたからです。このことがありましたし、また今は申し上げる必要のございません他の色々な理由のために、トリムはこの件の解決のために時間をかけたくなかつたのです。——ところが時間の余裕を置くどころか、彼は牧師館での勤勉ぶりとしつこいおねだりを却つて倍加させたのです——館の御一家の皆様を大変に困らせたのです——朝といわず昼といわず晩といわず、下手に出つつせがみ続けたのです。そして、手短かに申しますと、健康がすぐれず、このことでは弱り果てて殆ど息も絶えく／＼となつていたこの氣の毒な牧師を悩ませたのです。

トリムの坊ちゃん野郎の側のこうした大あわてぶりが、牧師殿の側に自然に或る効果を生ぜしめた、と申しましても不思議とお思ひにならないでしょう。それは、物事はその底を割つてみるとすべてが正しいとはいえないの

ではないかという疑懼の念のことでした。

牧師は或る夕刻、自分の書齋に一人坐つて、頭の中でこの疑念をあれこれといろんなふうに側量し、思いを巡らせていました。そして、この問題を一時間半も厳肅に熟考して、トリムの行動を全体に恒つてざつと考え直してみた後——彼は今まさに「どうもそうに違いない」と独りごとを言おうとしたのです。——ところがその時突然扉を叩く音が聞こえて、彼の独りごとは止められてしまつたのです。——そしてほんの数瞬のうちに彼の疑懼の念にもストップがかけられてしまつたのです。と申しますのは、町の人夫が一人、市民兵団所屬の治安官に連れ戻されて来ていたのです。彼は、自分を五十二歳は過ぎたと思つていたのですが、教会戸籍簿でその自分の年令を調べようと、手に四ペンス銀貨を握つてやつて来たのでした。——牧師はそのあわれな男に、銀貨はポケットにしまつて台所の方へ行つていなさいと申しつけました。——それから書齋の扉を閉め、戸籍簿を引き出してくると——「ひよつとしたら」と彼は考えました、「他ならぬこの夜番外套についても、この戸籍簿で何かが分かるかも知れんぞ?」——こう言いながら戸籍簿の止め金をはずした途端、彼はまさに彼が望んでいたものが、その最初のページの表紙の一枚の裏側にのりで張られた上にはつきり書かれているのに出つくわしたのです。そこには次のように明確な言葉使用で問題の当の物についての覚え書が書かれていました。

覚え書

この見事なる外套は今より二百年以上も前、莊園領主殿よりこの教区教会へ、あわれなる寺男とその跡継の者

たちにのみ永劫に恒りて使用さるべく、求められ与えられたる物なり。彼らはこの外套をば、冬の冷たき夜中や、終禱及び弔いその他の鐘を打ち鳴らす折にそれぞれ使用すべきなり。こはかの領主殿が、その敬虔の心持であわれなる者たちをあたためんがために、また彼らが祈りを捧げるべく導き給うた領主御自身の良き魂のためには、云々々々。

「こりゃ、まあ！」と彼は天上を見上げて自身に申しました、「危いところだったぞ！——こんなものをトリムのお内儀のペチコート用にくれてやろうなんて！ 私は全英国の大主教になるためにだって、こんな瀆神の策略に同意できはしなかつたろう。いや、言うことを聞かねば寺録の半分を取りあげるぞと言われても、外套のボタン一コでも粗末にしなかつただろう！」

このような言葉が牧師の口から出た途端、そこへ突然トリムが、両腕に只今の牧師の詠嘆の種である当の物をかかえてのり込んで来たのです！——そうです、両腕にかかえてと申したのです——といいますが、いやはやじつにトリムは、件の外套をはぎ取り、すぐさま裁断して、一方の腕には自分のジャケツ用の、一方にはペチコート用の半端の外套をかかえ、それを仕立てて貰いに仕立屋まで持って行こうと——そうして元気はつらつ、牧師殿にいかにかこの外套が全く完全な形を保つてりつぱに持ちこたえてきたかを見せようとて、牧師の書齋にまさに足を踏み入れたところだったのです。

今思い出したり捜し出したりする時間の余裕はありませんが、世の中には今でも生きて活用されておりますたく

さんの素晴らしい明諭というものがございます。それらは、この予期せぬトリムのずうずうしい策動のおかげで牧師殿がその表情に表わした驚愕と正直な怒りといったものを強く訴えるような類いの明諭なのでございますが——それに関してはこう申しおきましたら十分ということにさせて頂きましょう。即ち、トリムの行為は、筆舌に尽くしがたいものがあつたし、正当な怒りの力をすべて集めても及ばぬほどのものであつたということですから——ただしかし牧師はトリムに厳しい声で、包みをテーブルの上に置いて、自分の仕事に帰つて、翌朝十一時きっかりに、責任を負うつもりで私の命を待ちなさい、と言うにとどめたのでした。その時刻にそなえて、さすが賢者にふさわしく、牧師は教会庶務のジョンに来て貰うよう手を打つたのでした。この御仁、信実ある男としてりつばな卓越した性格の持ち主でありまして、なおその上に、この教区において年およそ十八ポンドの結構な自由保有権を持つておりましたので、そのあたりの名士でもあつた訳で、要するに彼は、——彼の職場が彼に名誉を施す——というよりはむしろ、彼の方が職場の方に面目を施してやる——と言つた方がいような人物の一人だつたのです。——その人物を、牧師は、教区委員たちも同道させて、その上に教会世話役の一人で、謹直、物知りの老人もともに出頭するようにと、呼びにやつた訳でした。——それというのも、トリムが自分から事の真相全体を話してくれてはいなかつたので、外套のことで彼奴は他の方々にもきつと同じような不始末を仕出かすことはありうるだろう、と考へられたからでした。ところで右の処置は仲々賢い処置ではありましたが、あまり警戒しすぎるのは余計なことだつたかも知れません。——何故なら、牧師殿の性質こそは、汚れなき、邪心なきものでありましたし——世間から名誉と廉潔の士との評価を受けておられた訳ですから。——トリムの性格はといえば、これとは反対に、世間に広

くともではゆかぬにしても、少なくとも教区全域にわたって、その卑劣、下劣、吝嗇で三百代言の両天秤野郎ぶりによつて、牧師殿の場合に劣らず、良く知られていたのでありまして——一ペニの得になると思えば、どんな事でもやり放題、言い放題だったのです。——こんなふうですから、どんな警戒をしても却つて無駄だと申し上げた訳です——が、御承知のように牧師殿はいわば教区での寺録にありつかれたばかりでしたので、代表者たちとの初の御目見えの際、ほんのちよつとでも悪印象を与えたらそのあとどうなるか、結果次第では、自分が望む通りの教区民への善導の仕事も出来なくなるやも知れぬと恐れられた訳でした。——そこで、当然自分に対して為すべき必要な配慮よりも、牧者たる彼のもとに来るべき羊群たる教区民のことを考えて——彼は、自制心を無くして怨恨や悪意の風を吹きあれさせるようなまねはすまいと決心したのです。——その結果、事件の全部が、牧師によつてはじめから終わりまで、私が申し上げましたやり方、即ち教会庶務のジョンの訊問の場にトリムが立つという形で、再現されたのでした。

トリムが自分を弁護して言った言葉は、ただ、「牧師先生は、今度の件ではあつしにもあつしの妻にも自分の出来る限り便宜を図つてやる、外套の処置は確かに私の権限内にあり、もしお前が望むならそれを呉れてやつてもいいと、断然約束されておられたですが」というものでした。

これに対する牧師の答えは、短かいが強い調子のものでした。「私に出来ることは、天地に恥じないようにとしかないのでよ。——あの外套をお前とお前の細君にやつてしまえば、あきらかに次の寺男セクストンに対して違法行為をすることになるだろうし、それにあの見事な夜番外套は教会で一等見た目にも悦ばしい景観になっているではない

か。——その上に私は、私自身の後継者の権限にも傷をつけることになるし、そうするとその人は、外套の総額の分だけ牧師としての値打ちが下がるといふことになるだろう。」そして「要するに」と彼は言明したのです。「私があの外套を約束したさいの私のころづもりのすべてを言えば、トリム君へのお情けということなので、誰に不徳義なことをしようと思つたのでもないのだよ。じつはそれがこういう場合の礼儀というもので」と彼は申しました。「たいていこういう時は遠慮があるもんだよ。」そして彼は司祭インツェルホフケルドレイヌの口調で、おごそかにこう宣うたのです。「私のころづもりではそういうことだつたのだし、トリム君自身もそのように了解済みだつた筈だよ。」

牧師殿がこの問題について申された言葉のすべてにしみ渡っているこのような真実の重み、偉大なる良識、そしてゆるぎない理性を前にしますと——あわれなトリムは最後の手段に訴えざるを得なくなりました——それで彼は、仮に約束は無かつたにしても、自分が励んできた数々の△奉仕▽を楯に、外套をいただく正当な権利を申し立てることをお許し願えまいかと頼み込んだのです。——じつさい彼の奉仕ぶりが、なるほどこれでは外套を貰う資格も十分あるだろうと思わせるほどであつたことは、人のよく知るところでした。ちなみに彼は数え切れぬほど牧師の靴をみがきましたし、五十回以上も牧師の半長靴にグリースを引いたのです。——彼はどんな時でも町へ卵を買いに走りまわりましたし——いつでもナイフ類は磨いておきました。——牧師の馬を追つては梳つてやりました——彼の細君とはいえば、何時でもよろこんで雑役の奉仕をしようとしていました——そして彼が思い出す限りでは、彼も細君も、一フアーシングあるいは一杯のビール以上のものといえども貰いはしませんでした。——こうした彼の数々の奉仕についての説明に加えて、それに劣らず大きかつたと自分では言っている、彼の真底よりの△願望▽

について説明させて欲しいと彼は申しました。——彼は次のように主張したのですが、そのさい——証拠はいくつもあるからそれを見せてはつきりさせるころづもりは出来ているなどと申したのです。さてその主張とは——

「あつしあ千回も尊師の健康を祈つて乾杯をしましたよ。(ついでながら申しますが、彼は牧師自身のビールから自分のにつき足すといったことはしませんでした。)あつしあ通り一遍に先生の健康を祈つて乾杯しただけじゃありません、あつしあ本当に心から先生の御健康を願ひ上げたんで。それで館へ行かなかつた時でも、先生はどうしていらつしやるか側人の方にねんごろに訊いてみたもんです。とくに一年半ほど前に、先生がリンゴの皮をむこうとして指をお切りになつた時にゃ、あつしあ半マイルの道を歩いて、或る秘法に通じた女んとこへ、血イ止めるためにやあどうすりゃいいか訊ねに行つて、じつさいクモの巢(6)をズボンのポケットに入れて帰つて来ましたんでさあ。——いいや(とトリム)ありやあ二週間も経つちやあいませんさね、先生がああきつーい下剤を飲まれやして、そいであつしが町の一等遠い外れまで行つて、先生のために室内便器を借りて来てさし上げたでやんしよ——そいであつしをバカにしている近所の連中が皆んな証明してくれてますがね、その皿みたいな器を頭にのつけて帰つて来ましたんで。そいででもこんなこたあ大したこつちやねえと思つてますがね。」といった具合。

トリムは、その哀調たつぷりの抗弁をこう言つてしめくりました、「先生のお心が、あんなにたくさん真心こめて尽くした奉仕に対してあんなつれないお返しで報いてやろうなんてなさらぬよう願ひますだ。——もしお考えの通りになされますなら、こんな目にあつたのはあつしのような身分の者ではあつしが始めてでしょうから、同様にこんなこたああつしで最後にして頂きたいです。」——トリムが専ら心をくだいていたこの抗弁の意図も——結局

はその場全体に笑いをもたらすより他の返答の余地を残してはくれませんでした。

全体として申しますと、両方の側からの賛否両様のあらゆる言いが公平に聞き届けられました結果、トリムの方が、この事件の細部においてことごとくそのふるまいよろしくない、ということがはつきりしたのです。——その上彼の仕業であるなどは予想もつかなかった或る出来事が、この論議の最中にたまたま彼への批難としてあかるみに出されたのです。——即ち、トリムは牧師殿が館に入られる前に牧師殿に会って、庶務役員のジョン——ならびに教区委員たちや教区のお偉ら方の幾人かも、皆んな＼悪党＼の一味であると、つげ口をしておったのであります。——こんな訳で、とうとうトリムは扉の外へ蹴り追いだされて、この忠告を無視でもしようものなら身の危険があると思え、二度とここに戻って来るんじゃないぞと申し渡されたのであります。

最初トリムはこの仕打ちに物凄い形相で飛び上って腹を立てました——正当な理由を手に入れてやる——それに、これを莊園録事裁判所に訴えて、この教区全体にいかにも牧師が自分を虐待したかばらしてやらなきや気が済むものか、と毒づきました。——だが冷静になつて考えてみると、牧師はあるいは自分に謹慎と云ったことまで誓約させるかも知れないし、何とも言えないが察するに自分を懲治監に収容してしまうかも知れない、と恐ろしくなつて——彼は牧師には何も仕返しをしないでおこうと思つたのです。ところがやはり、彼の復讐の念やみがたく、今度は貴殿や小生同様この騒ぎには関わりの中なかつた庶務のジョンを攻撃しはじめ——＼黒いブラシ天の古い半ズボン＼の約束状を引裂き、十年間眠つていたこの半ズボンに関する騒動を引き起こしたのでした。⁽⁷⁾——しかし、御承知願いたいことに、こうしたトリムの悪巧みはすべて、騒動を起こしたり、身に受けた膺懲を楯にしてその実自

分の保身を図ろうとする、トリムの狡猾な手腕によるものと専ら見なされたのでした。

もし貴殿の好奇心がまだ満足されていないとあらば——さてこれから、△夜番外套▽の一件でお話し申し上げたのと全く同じやり方で、△半ズボン▽をめぐる△合戦▽についてお話し申し上げることに致しましょう。

当時、十年ほど前のことですが、ジョンがこの教区の教会庶務役員に任命されました時には、御当人のトリム坊はこのジョン殿の気に入られるよう少なからざる骨を折ったということが知られています。後に分かったことですが、その魂胆とは、ジョンがその当時手もとに置いていた黒いプラシ天の半ズボン——結構着れないことはない——をうまく説きつけて彼から貰い受けることにあったのです。——そのさいトリムは、ジョンがその半ズボンを捨ててもいいと思った時に自分がそれを貰えるようひたすら神の御慈悲を乞うたのでした。

トリムは内心ではちよつとぴかぴかものが好きなたちの人間でした。そして彼の細君が作ってくれた最良の、質素な傷一つない服を着るよりも、むしろ上流人士の着古したボロを着たいと思うのでした。

ジョンの方は生来ものごとを疑わない人物で、教区牧師が例の夜番外套を約束されたと同様、彼も、文句も言わずにその半ズボンをトリムに約束したのでした。そしてそのさい留保条件などもつけなかったのです——というのも、半ズボンはジョン△自身のもの▽でしたので、自分が適当だと思う人物にやっても、それは不徳義なことにはなり得なかつたのです。

トリムにとつては不運にも、と申したいところですが、むしろ彼にとつてもっとも幸運なことに、と申し上げる

べきでしょう——というのも彼は、次に述べますことによつて唯一人の利得者となつたのでありますから——さて
実は、先のことがあつておよそ六ないし八週間すぎた頃に、前の、今は故人となつた教区牧師(8)と庶務のジョンのあ
いだで或る喧嘩が持ちあがつたのです。誰かが（それはじつはトリム以外の誰でもないと考えられたのですが）そ
の故牧師殿に次のような事実を思い出させたのです。即ち、教会にあるジョンの（机）が規定よりも四インチ高い
こと——その机は牧師自身の机と殆ど同じ高さに来ているので、感じが悪いし、だいいち不法なことではないかと
いつたことでした。この不正に対する不満をこの故牧師殿は声高に訴えました——そして或る日お祈りのあとジョ
ンに向かつて言つたことには、「もうこれ以上は我慢ならん——机の高さを当然の位置まで下げてもらいたいもん
だね。」これに対してジョンは、「机を高くしたのは私ではないんです。——私がそれを手に入れました時より髪の毛一筋も高くなつてはおりませんよ。——私は今まで通りにしておきたいと思ひます。——要するに私は権利侵害
をやるつもりはありませんし、自分がそれをやられた場合には黙つてゐるつもりもないのです」と答えただけでし
た。

この物故した牧師には色々な美德もあつたことでしょうが、彼のもつとも顕著な特質とは、少なくとも謙遜とい
うことではなかつたのでした。従つてジョンが右のように答えて譲らなかつたため、事態は紛糾の様相を呈してき
ました。——じつはこれが第三者のトリムには収穫だつたのです。

ジョンに頑張つて下さいと好意的な暗示を与えた後——急遽トリムは牧師館で或る取引をしました。——そこで
どうということが起こつたかについて私は、あまり批難がましく言いたくありませんので、申し上げる訳には参りま

せんが、そのことを私は、トリムの服装が突然打って変わって見栄えが良くなったという事実によつて推測するにとどめておきましょう——というのも彼は、その古くなったボロの外套と帽子とかつらを馬屋の中に抜き捨て、新しく牧師が丁度彼に呉れたばかりの、大そう見事な不用になつた外套と大きな帽子とかつら(9)を着けて、教会の庭を大げさな歩きぶりです。——いよ、ほ、ほうい！ ジョン先生！ とトリムは、あげたこともないほどの大声で横柄にも喝采したのです——ねえ、あつしのきれいなことを見て下さいよ。——あいにくだが君はその恰好、余計にみつともないよ、と冗談も言わずにジョンは申しました。——トリム君、きみは、とジョンが言うには、あんなに尽くして得たそのぴかぴかものが自分に似合うとでも、またはそんなものを着れば自分が若々しく見えると思つているのかね？——なんて人だろう、君って人は、——君がこんなことをするのは！ 何しろ君はさも友情にあふれているかのようにして見せていたし、それに私だつてずいぶん君には親切を尽くしてきましたからねえ。——君が困つている時、私は君に、何シリング、そして何ペンス、何も言わずに貸してあげたことでしょうか？——然様、私が君に、私がいっているこの黒いブラシ天の半ズボンを約束したのはほんのこの間のことでしたね。——お前様のズボンなんぞ馬鹿々々しい！ とトリムが言います。——というのもこの時トリムの頭は、もう彼の新しいぴかぴかものの方に半ばいかれていたのであります。——お前様のズボンなんかクソくらえだ、とトリム、——そいつがあつしんちの扉の下に置いてあつたつて凍もひっかけるもんじゃありません——お前様のお好きな方に差し上げて下せえ。ざまあみろだ。——あつしあ週の何日でも好きな時に牧師様の家へ行けばもつといいズボンが貰えるんだつてことを、お前様に教えてやりたいもんだ。——さて、ジョンはトリムの言葉がひとまず終わ

ると、トリムにはつきりと、自分はそのズボンを他人に譲るに当たって自分の厚かましさを利用してやるようなこととはしない——だが、腹藏なく言えば、君は牧師殿からそのようなたくさんの好意を受けて来たし、これからも同じように尽くしてもっと多くの好意を受けるだろうと思うので、君は生来善良なのだから、その半ズボンはあきらめて、もっと有難がつてくれる人に譲った方がいいよ、と言ったのでした。

ここでジョンは、マーク・スレンダー⁽¹⁰⁾の名を挙げました（この人はその前日ジョンに半ズボンを貰いたいと申し出たようです）が、彼はそれがトリムに約束してあつたものとは知りませんでした。——ねえ、トリム君、ジョンが申します、かわいそうなマークにあれをやってくれ——ご承知のように彼は、自分のケツの穴を隠す専用のズボンすら持っていないのだし、その上、お分かりだろうが、彼は私と同サイズだし、あれは彼にぴったり合うだろうからね。だがもし私がそいつを君にやるとなればだ——いいかい、そいつは大して価値のないものになり下がるよ。それにまた、君のものになつたとしても、そいつに君のケツを通そうとすれば必ず皆んなバラバラに切つてしまわなくちゃならんだろう。

このことはいささかの疑問の余地なく真実でありました。というのも、知っていて貰いたいのですが、トリムはそのいやしい食いつぶりと、牧師館での優等生ぶりのおかげで、身体の下の方が——上の方ではないとしても——いくらか太つてきていたからです。かくしてジョンがこの場で言ったことはすべて事実だったので、トリムはさきんに騒ぎ立て、百もの「ふーん」を連発して躊躇したあげく、ついにあきらめ、マークへのただの同情心にかこつけて、△件のズボンに対するあらゆる権利、要求権、請求権等のものはすべて引き渡すこと、夫れによって彼の

法定相続人、指定遺言執行人、管財人及び譲受人に当該の物を要求することのないように義務づけること∨を約束して署名捺印したのです。

この抛棄宣言はすべて、ハダカ同然のマークに純粹に同情せんがために大げさな仕草で行なわれたのです。——しかしトリムがこのズボンをあきらめた本当の理由とは、じつはその年に取り外されることになっていた緑の説教壇用の布とビロードのクツション⁽¹¹⁾に目を付け、内心それらを手に入れようと固く期していたからなのです。——ついでながら申しますと、ふたたびジョンを甘言で欺いて望み通りにそれらを手に入れることが出来たら、彼は半ズボンの損失を七倍にも取り返していたことでしょう。

ところでこれも御承知願いたいのですが、この説教壇の布とクツションの授与権はジョンには無くて、教区委員たちの方にあつたのです。——にもかかわらず、私が先に申しましたように、ジョンはこの教区の名士でありましたので、もしその気があれば自分を援助してくれるだろうとトリムは当てにしたのでした。——しかしジョンはもうトリムとのつき合ひにはあきあきしていたのです。——それで、説教壇の布その他が取り外されると、ただちに、それらの使用意図をよく承知していたウィリアム・ドウ⁽¹²⁾にそれらは譲られたのでした。(ジョンはこの取扱いに關しては強い発言権を持つていたのです。)

古い半ズボンについては、あわれなマーク・スレンダーは、結局ほんのしばらくしかそれを着てはいませんで、やがて亡くなつてしまいました。それでズボンはロリー・スリム⁽¹³⁾という^{アンラック！}不運な男^{ワイト}∨の所有するところとなり、今でもその男がそれを着用しているのであります。——ところで、ご想像のことと思いますが、そのズボンはこんな

にも時間が経っている訳ですから、すり切れてうすくなっているのです。——しかしロリーという人物は陽気な心の持主でありましたので、そんなことは気にしません。それどころか、彼がそのズボンを譲り受けようと思つたのはこういうことでした。つまり、成程ズボンはすり切れてうすくなつてはいるが、トリムというやつはそれにもかかわらずそれを持っているやつがうらやましくてならない（そうじゃないと言いたければ言わせておきましょう）し——他人が使つた後でも、それを自分が着れば得意満面大よろこびするような奴だということが分かつていたからです。

このような関係のまま、これらの事件は十年近くの間ねむつていたのでした。——そして、私が申し上げました今回の騒動をあらたにひき起こすもとなつた不運な入蹴り合いの一勝負が無かつたなら、恐らく永久に眠りつづけていたことでしょう。ところがつい先週のこと、トリムが、町に通じる公道でジョンに会い、百人もの人々の前でジョンを侮辱するという仕儀に至つたのです。——トリムは自らそれを放棄したにもかかわらず、例の古い捨てられた黒い半ズボンの約束の件についてジョンを責めました。説教壇の布とビロードのクツシヨンのことでも彼を詰りました。——それはまるで、ジョンが教会庶務としての平生の義務について全く無知であると批難したも同然の言い方でした。彼はさらに極めて横柄に、ジョンは普通の賛美歌を調子正しく唱道することさえ出来やしない、と付け加えました。——

これに対してジョンは、余計なことは言わず、トリムが自分に責任ありとした事柄のすべてに正確な返答をすることだけで自分を満足させました。そして事件全般のことを知っていた近隣の人達に自分への同意を求めたのです。

——彼は、煙突掃除夫のような相手と格闘してもどんなもうけにもならないことを承知していましたので、もういっさいトリムのごとはこちらから御免こうむってこの場で別れるつもりでした。——ところが一寸お待ち下さい！——この時までにはもうやじ馬連中が二人のまわりを取りまいていて、町の偉いさん達もトリムをただちに審問にかけよと主張されたのでした。——こうしてトリムは審理に附されました。そして充分な審問の後、ふたたび罪ありと宣告され、そこにいた人々の一人かそれ以上の者から牧師館でなされたよりもっと乱暴な扱われ方をされたのでした。

おい、トリム、とその一人が言います。半クラウン銀貨の値打ちもない古いすり切れた不用の半ズボンのことで町中にこんな騒動と混乱をひき起こし、隣り近所の連中を仲違いさせて、お前は自分が恥ずかしくないのか？——お前はじつさい飢えた犬みたいにいやしきひつたくるようなまねをしなければ、この町中のどこにも、お前に一シリングもかせがせるようなボロの外套とか勤め口など得られやしないことになるぞ。

だいいち、お前は年に三ポンドもかせげる寺男兼犬追い役ではないのか？——それにお前は教区委員たちに拝み込んで、お前の女房に法衣や教会用のリンネル類を洗ったり繕ったりさせるよう仕向けた。それで十三シリングと四ペンスはかせげるからだ。——さらにお前は大時計に油をさし、ねじを巻いて、六シリングと八ペンスもうけている。どちらも復活祭の時にお前に支払われたろうが。——例の動物困い込みの役目——年に四十シリングも貰える役だが——お前はあれも貰っているだろう。お前は先の牧師殿が呉れた地主代理の地位にもついているし、それでもってさらに四十シリングも貰えるじゃないか。こうしたもうけ分のすべてに加えて、お前は牧師館のモグラ取

りの役で、年季払いの年六ポンドもかせいでいるではないか。——そのとおりなんですよ、と先ほど言った△不運な男▽が、（彼は件のブラシ天の半ズボンをはいて、トリムを難詰している男のそば近くに立っていたのです）ここの言葉を入れます、「トリム君、君はモグラ取りだけじゃないね。君はこっそりくらがりで△迷いウサギ▽もつかまえていただろうが。それを君は、その許可は得ているからと偽っているね。しかしこの件については、次の四季治安裁判所で詳しく調べられるだろうよ。」あつしはそれを得ておりますよ、あつしはその許可を得ておりますですよ、とトリムが恥辱でまっかになりながら言います。——あつしには許可証がありますよ——それにあつしは隣の教区で養兎場を作るので、夜間いつでもウサギをつかまえようと思っているんです。——すると、丁度通りかかった齒抜けの婆さんが叫びました、△かわいいうサギつ娘⁽¹⁵⁾をだましてひっかけるだなんて、まあ！▽——これには皆んな大笑い。したところで誰も彼も上機嫌で家路にいたのですが、ただトリムだけが取り残されました。彼は、これほどのよたよた歩きをするものは地上の被造物のうち一種類しかいない、またそれ以上のことをする動物は他にはいない、といった歩き方で、硬直した威厳をせいぜい保ったまま、ゆるりゆるりよたよたと歩き去ったのであります。

では、これにて。

敬 具

注

- (1) ホラティウス『諷刺詩』(I. X. 14—15) から。Tom Keymer 編のヘヴリマン版『センチメンタル・ジャーニー』その他(一九九四年)の注釈には、クリストファー・スマートによる次の訳が紹介されている。'By satire in a pleasant vein, / A weighty point we offer gain, / Than talking in severer strain'(Christopher Smart, *The Works of Horace, Translated into Verse* (1767), III, 127).
- (2) 「ユカリング・ホクリントン 特別教区法廷主教代理職」のпатентのアレゴリー。ヨークの首席司祭^{デューイ}の Dr John Fountayne (1714—1802) に所有権があった。「教会庶務役員^{エグゼクティブ}のジョン」のモデルが、このジョン・ファウンテンである。右のпатентを狙った人物が、教会弁護士^{エグゼクティブ}の Dr Francis Topham (1713—70) という人物で、主人公「トリム」のモデルである。彼はまた、『トリストラム・シャンディ』の「ディディウス」のモデルでもある。
- (3) 「財務裁判所及び遺言事件裁判所代理職」のпатентのアレゴリー。ヨーク大主教(作中へ教区牧師として登場する人物がそのモデル)に授与権があった。先のフランシス・トパムは一七五一年にこの役職を得たが、これを自分の息子にも遺贈したいと図ったことが、騒動の原因となった。
- (4) 「教区委員たち」(Church-Wardens) はヨークの「主教座聖名^{プレジビテ}参事会員」(prebendaries)のこと。この後に出てくる「教会世話役」(Sides-Men) は、大主教の周りの幹事たちを指している。そのうちの一人で、主教管区尚書係(Diocesan Chancellor) のヘリング Dr William Herring (1691—1792) は、スターンの十年来の同志であったが、ヘリングがヨーク大聖堂の参事会員の公舎の居住権を自分の息子のために確保しようと画策したことから、立場上自分が貰えるものと思っていたスターンとの間に確執が生じた。Cf. A. H. Cash, *Laurence Sterne: The Later Years*, pp. 77—80.
- (5) 作中、へ教区牧師のモデルとなった新参のヨーク大主教は Dr John Gilbert (1693—1761) で、一七五七年にヨーク

に來た。

- (6) 「クモの巢」は血止めのための原始的方法であつたとされる。『真夏の夜の夢』三幕一場一八三—四行参照。
- (7) 「トリム」ことフランシス・トパムが書いた、ジョン・ファウンテン攻撃のための小冊子——*A Letter Address'd to the Reverend the Dean of York, in which is given a full Detail of some very extraordinary Behaviour of his, in relation to his Denial of a Promise made by him to Dr Topham (York, 1758)* のこと^を暗示。
- (8) 一七五七年までヨーク大主教を務めたDr Matthew Huttonのこと。彼はフランシス・トパムにそのかさされてジョン・ファウンテンとの喧嘩にまきこまれた。「ジョンの△机▽」はそのトパムの権限にかかるものを暗示する。スターンはこの場面をボワローの『見台物語』から得たのかも知れない。
- (9) 注(3)に同じく、一七五一年にトパムが得た「財務裁判所及び遺言事件裁判所代理職」のこと。
- (10) 「ピカリング・ポクリントン特別教区法廷主教代理職」及び「ヨーク大聖堂首席司祭および参事会チャプター代理」のпатентを得ていた弁護士Dr Mark Braithwaite (d. 1750) のこと。
- (11) 右の注にいう、「ヨーク大聖堂首席司祭および参事会チャプター代理」のпатентのブレゴリー。
- (12) 一七五一年に「ヨーク大聖堂首席司祭および参事会チャプター代理」に選ばれたWilliam Stablesという人物のこと。
- (13) スターン自身を指す。彼は右と同じ一七五一年に「ピカリング・ポクリントン特別教区法廷主教代理職」を得ていた。
- (14) 原文では「The Pinder's Place.' Cf. 'pinder' = an officer of a manor, having the duty of impounding stray beasts. (O. E. D.)
- (15) 原文では「CONNES' = rabbits. 「ウサギ」は俗語で、「だまされやすい人」のろま。(卑猥な意味を込めて言うさいの)特に、「女性」を意味する。

「鍵」の章

この物語は、どういう不運からか、ヨーク大聖堂の境内に落ちていたのを、この町の或る小さな政治クラブの一人員によって拾われ、クラブの会合の最後の晩、皆んなの前で公然と読まれる次第となった。

大多数の者がただちに一致したのは、これは「 \wedge 権争 \vee の物語」であるということだったのであるが、しかしそれが一体いかなる国家なり権力者に関したものであるかについては、そう他易く彼らの間でも決着のつかぬ問題となった。

そこでまず、政治的な事情に関してはクラブ全体の中の誰にも劣らず、明晰かつ慧眼といわれる当夜の議長が、この「物語」の中に述べられている騒動は、大陸の方の事件と関係があると判断を下した。——即ち、まず「トリム」は、その目まぐるしい、索略にとんだ行動でもって全ヨーロッパを騒動にまき込んだ「フランス」の王⁽²⁾でこそあります。——トリムの細君は従って、「王妃」であることは間違いありません。王と王妃はどんな夫婦に劣らずお互いに、と議長は続けて、愛情あふれる方だからして、——だったらいつそう恥の上塗りではないか、と市参事会員がこの時ひとり言をいった。——この「鍵」に合うと言いますのですな、次のようなことです、と議長は続け

る——この「物語」の中でもっとも素晴らしい人格者と見ております「教区牧師」の方は、かの畏れ多きジョージ国王陛下⁽³⁾でありますぞ——それに対して教会の庶務の「ジョン」はプロシアの王様に当たるんですな。彼の王は初めてサクソニイ⁽⁴⁾の地へ侵攻したそのやり口によって、世界に対して明々白々に、次のことを示したのです。即ち、トリム奴のあれほどしつこい、汚ない侮辱的なふるまいにも拘らず、彼は讚美歌を、その調子と拍子も見事に、先導する術を知っておったということです。——ではそれならばですね、と隣に坐っていた外科医にして男産婆が言った（彼のコートボタンを、議長は説明に夢中になつて、ぎゅうつと固く握りしめていたので、それによつてこの男を自分の意見の方に幾分引張つて来ていたのだつた）、それならばどう思われますか議長殿、と外科医兼男産婆はかさねて言う、「教区委員たち」、「教会世話役」、「マーク・スレンダー」、「ロリー・スリム」などはどうなるんですか？——私の考えかね？ と議長はさらに彼の意見のご披露に及ぶ——そうさな、うん、つまりですな、私の考えによりますと——「教区委員たち」と「教会世話役」は、選挙候達及びドイツ国を形成する他の諸候でありますぞ——それから、他の、「マーク・スリム」⁽⁵⁾——例のプラシ天の半ズボンをはいた「不運な男」ですが——とか、しばしばどこかへ行つてしまふ「牧師の側人」のような、重要でない人物たち——これらは恐らく、そのお偉方のもつて最後の戦を戦つたか、あるいは戦うべきであつた筈の幾人かの「元師」や「將軍」⁽⁶⁾達のことでありませぬ。——こわばつたワラ人形⁽⁶⁾みたいな男たちはですな、と議長は続けて、プロシア陸軍の親衛隊であつて、彼らは世界の軍人に劣らず強壯な男たちの一団なんですな。

そして、トリムが、その数十二はたまた十九、と言っているのは、思うに、軍隊その他のどんな事についても二

週間と話のつじつまの合ったためしのない「ブラッセル・ガゼティア」誌に対して一発平手打を喰らわせた訳ですな。

「物語」の残りのものについては、と議長は続ける。事自ら明らかになるという次第で——「打ち捨てられたる黒いプラシ天の古ズボン」は「サクソニー」ですよ、それを、よろしいか、選挙候が「抜き捨てて」おったんですな。——それから例の「大きな夜番外套」の方は、御存知のように何でもかでも包んでしまうというやつだが、それが全「ヨーロッパ」ですわい。そこには、少くとも、我々が現在の戦争において幾らか関心を払っている多種多様なヨーロッパの諸国、諸領土が含まれておるんです。

なあるほどたしかに、と議長の一人おいて隣りに座っていた、多分、教区の牧師で、政治クラブだけでなく、隣の通りの音楽クラブの会員でもあると思われる一人の紳士が言った。——なあるほどたしかに、と彼はくり返して、もし今の説明が正しけりゃ——私はそう思っていますかね——全部見事な象徴になってますねえ。——あんたはしょつ中、頭ン中に音楽の楽器か何かを考えとるんでしような、と市参事会員が口を挟む。——楽器ですつて！と牧師はびつくりして叫ぶ。——市参事会員殿！私は寓意物語だと言ってるんですよ。思うにですな、「大きな夜番外套」をずたずたに引き裂いて、一方にはペチコートを、他方にはもみ革製胴衣をそれでもって作ろうとしているトリムと、彼の細君のいやしい性癖は、かつてなくお見事な寓意です。世間にはこれで、ブルボンとオーストリア両家の忌まわしい連合の、真の意図が何であつたかを教えることになりましょう、——この組み合わせは醜業とでも呼ぶべきものですよ。——いや、それを言うなら、と市参事会員は口を出して、全くの姦通事件だよ、さも

なきや、何でもなないよ。

議長がこの仮説は、この「物語」の中のあらゆる事柄を極めて上手く説明していた。かつまた、これが、クラブの三分の二の意見を一つにまとめたかのように、非常な迅速さと確信の様子でもって伝わったので、実は議長殿ご自身がこの「物語」の作者に他ならないということになった。ところが、テーブルの向かい側に坐っていた一人の紳士が——この御仁は、丁度ウイリアム王及びアン女王戦争(9)の歴史を讀んできたばかりで、その知識が頭に詰って湯気でも出そうな様子、それにこの御仁、心底は議長に対して、この「物語」の作者にもされ、またその解説の巧さを誉められたその榮譽を羨んでいたと思われた——この紳士が、議長の解釈に対して全く新しい別の解釈を与えたのだった。彼がクラブ員に知らしめたのはこういうこと、即ち、議長殿は、彼が示したあらゆる想像において全面的に間違っている。但し「大きな夜番外套」が「ヨーロッパ」を、あるいは少なくともその大部分を表わしている、と言ったあの箇処だけは間違つてはいない。——その点までは議長はわりあい正鵠を得ていることを紳士は認めた。が、しかし議長殿は、わが国の過去の歴史をふり返つて、眞実の解釈をその中に見つけようとはなさらなかつた、と言うのである。紳士は、そこで次のように人々に説いた。即ち、「大きな夜番外套」はあの「分割条約」(10)以外の何者をも意味せず、また意味することも出来ないのである。ちなみにそれは、と彼が言うには、ウイリアム王の全生涯の中でもっとも不幸かつ恥ずべき処置であつた。あの誤つた一步が、そしてあの一步こそがです、と彼は自分の椅子から起ち上り、手でテーブルをどしんと叩いて、あの誤つた一步こそが、彼はまた額に八の字を寄せ、パイプを下にぱつと投げ捨てながら言う、あれこそが、我々がまさにこの瞬間にも感じ、また嘆くところの、すべ

ての混乱と悲しみの原因をなしたのです！ トリムが「半ズボン」を放棄したのは、いいですか皆さん、それは殆ど逐語的に、フランス王と皇太子ドフィインの、スペインと西インド諸島の放棄を模倣したものです。それらは全世界によく知られているように（「半ズボン」の場合もまさにそうですが）、時至れば返還してもらおう目的で、彼らはそれを放棄したのです！

この解釈は、全く無視されるにはあまりに巧妙な出来であった。それに実際のところ、その最大の欠点にしても、それが少々度をこして熱烈であるというくらいであったのである。だがこの熱が（暖炉の側に坐っていた一人の薬剤師が、低いささやき声で隣りに坐っていた近辺の人物に意見を述べたように）この説明のあらゆる条くわじに、あんまりどっさり注ぎ込まれたので、そんな熱を加えすぎた「発酵作用」のもとでは、所期の効果をあげることも出来なかつたのである。

しかしながらこの強力な説明にしても、ある小さい勇敢な紳士を圧倒して、——彼は先の紳士のまさにその横に坐っていたのだが——東と西ほどにも真向うから直接的に対立している自分の意見を、引つ込めさせるといふところ迄はゆかなかつたのである。

この紳士は、クラブ全体の中で、大いにすぐれて地理学者であり、さらに或る機械技師のまたいとこであつたが、「半ズボン」こそは「ジブラルタル」⁽¹¹⁾であると確言したのである。というのもですね、紳士諸君、思い出して頂きたいのですが、と彼は言った、ひよつとしたら思い出しにならないかも知れませんがね、あの町とその要塞の平面図と輪郭図を見ると、まさに「中ズボン」⁽¹²⁾に——その二つの突起の部分が二本の脚やなんかに当たる訳ですが——

似ているでしょうが。——ところで我々皆んな知っているように、と彼は続ける、ジョージ二世王はスペイン王に對して大事な通交の約束をしたのです。——それ故この『物語』の全体的主意は、私のものの感じ方からすれば、世間を大きく騒がせたその取引を行なつた国王と議會權力を強く指示していると思ひますがね。

ここで、一人の卸しの仕立屋が、——議論の場では一言もしゃべらぬと、初めから決心していたのだが——最後に言つた紳士の言葉の中の、何か思いもかけなかつたことに觸発されて、とうとう論戦の渦中に引張り込まれたのである。

この仕立屋が、卒直に皆んなに言つたことには、「平面図」なんてのは何のことか分かりませぬのじゃが、——しかし「半ズボン」の形に関しては、何しろしょつ中、何百というズボンを裁断しているという、このさい有益な経験があるので、自分も他人のように、問題の事柄について判定させて貰えるんじゃないやなろうか、という次第。

そこで思ひますのはじゃ、と仕立屋、水と陸から成るこの球体のどこにもですな、(地球の地図が彼の仕事場に懸つてるといつたふう) シシリー島ほど、未だ仕上つていない前の「半ズボン」に似ている所はありませんですわい。——いやおまえさん、そこまで言ひなざるならばじゃね、と晴れてこのクラブの会員となつた正直な靴屋が口を入れた、わつしに言わせてもらえば、イタリアの王国ほど、長靴に似とるもんはありませんやね。——イタリアやシシリーが、このことと、一体全体、どんな関係があるのかね? と、この時までには自分の仮説がゆらいできて、気をもみはじめていた議長が叫んだ——いつたいどんな関係があるんじゃないや?——そらまあ、とさっきの「分割条約」説の紳士が、活気とうれしさをその眼にみなぎらせて答えた、——それはですな議長殿、この論争であなた

の仮説をくつがえして、疑問の余地なく、私の解釈の正しさを確かなものにする程度には、大いに関係がありますよ。というのも、と紳士は続ける、(まるで議長の政治論を王者のごとく打ち破った風に)——「分割条約」によつてですねえ、議長よ、ナポリもシシリーもまさに、フランス皇太子に譲渡されるべく定められた王国に変わったのでありますからな。——そうしてトリムが牧師の長靴にグリスを塗つてやった話は、これは恐ろしく諷刺の利いた一撃なのでありますぞ。——それといえますのも、これが、ローマ法皇にさっきの王国の譲渡資格を他の誰にも与えさせないで、独占しようとして、イタリアの諸州及び諸侯の考えを変えさせ、彼らの利益をローマで使わせようとする、その大事な時に当たつて利用された汚職・贈賄をすつば抜いているからであります。——法皇はシシリー島の譲渡資格など持つておらんわい、と別の紳士が叫んだ。——そんなことは、と先の紳士が答えた、かまうことはないですな。

殆ど誰もが、これでついに論争は終わったと思つたのである。それに、こんな多くの、明白かつ決定的な解釈が出されたあとでは、この「物語」についてさらに何か新しい臆説を試みようとは誰も思わなかつたであろう。ところがこの時、一寸待つて頂きたいと声が入つた。——暖炉の近く、薬剤師の向かい側に、もう一人の紳士即ち弁護士が坐つておつたのであるが、この御仁、この異議申し立て騒ぎの初めから終わりまで、そこで進行するどの意見にも心から満足してはいない様子だったのである。この紳士は未だ口を開いていなかった。みんなが向こうの方で色々論証を出してしまうまで辛抱強く待つておつたからである。——専門の弁護士よろしく、論争における最後の言葉を言うために自分を保つておいたというわけ。そこで「分割条約」の紳士が自分の言い分をいい終えると——

彼の紳士は立ち上がった——そしてテーブルの方へ近づいて人々に言ったことには、この「物語」の中の色々な事実をさぐり当てるためこれまで皆さんがやってきた間違いは——あまりに事件を高級にとりすぎたことにあつたのです。それは、と弁護士はここで非常に虚心坦懐な様子を示して、あなたがたのようなこんな政治クラブにしてみれば至極当然なことであり、また同時に極めて無理もないことではありませんね。例えばですね、彼は続けて、あなたがたは「登記簿」のことを調べて、王や皇帝の登記行為を探っておられましたね、——まるで王や皇帝といったお偉方しか、世間に示すべき、あるいはこの「物語」のたとえとなるべき法律行為をしてはいないかのようにね。——これはまるで、と弁護士はさらに続けて、私が四十シリング以下の債務を出鱈目に上院に持つていって、次の州裁判所で六シリング八ペンスを決めて貰うみたいに、弁護士の通常の道を外れております。——彼はそれから「物語」を左手に取り上げた。そして右の人差し指で第二ページ目を指しながら、謙遜の面持ちで、次のことをお聞き願えまいかと言った。(公平に評すると、彼はその願いを幾分法廷弁論の口調でやったのである。) 即ち、「牧師」、「ジョン」それに「寺男」は、三者構成体であることを示しているのに間違いない、と言うのである。そこで紳士諸君、もしあなたがたが注意されるならば、と彼は言った。この組織の当事者達であるこれらの連中はですね、ただそのままの聖職者たちなのであります。「聖書台」、「牧師の聖服」、それに「ビロードのクッション」もまた三者構成であります。そして法律的に見ても、それらは聖職者たちだけに、そしてつまり聖職者たちだけに、所属し付属する、聖職者的な性質を持った家財道具に他ならないのであります。——そういう訳でありますから、この件は私には極めて明々白々の事に思えるのでありますね、つまりこの「物語」は、直接的にも間接的にも世俗の事柄

をいつているのではなくて、総じて教会における事件を扱っているのでありますよ。——そこであなた、こうお思
いになりませんか？ と彼は少し声を和らげ、苦笑いを浮かべている牧師に向かって言う、——こうお思いになり
ませんか先生、つまりですね、「物語」の中の「ジョンの机」の高さについての、教区牧師とジョンの論争は、教会
の方々の謙遜の美德に対する大変お見事な大讃辞となつてはおりませんか？——いやまったく、思うに、と牧師
が答えて、これは、おまえさんの職業がおべつかを使われるのと同様、大いに素晴らしい出来上り、トリムの、け
ちで汚い三百代言的な性格にそれがよく出ておりますわい——こりゃあ、私の意見によると、まさに、弁護士の方々
の正直の美德に対するもう一つの大讃辞でありますな。

ところで世に軽蔑ほど人を刺激するものはないのである。——それ故この牧師は、明らかな優越性と異常な激烈
さを表わして言葉が続けた次第である。——あなたは何しろ法律の適用がうまいのでなあ、弁護士殿、と牧師は続
ける、——どうか「物語」の一、二ページお捲りになつて、例の黒い法律文字のところをあけて下さい。——その
箇処についてどうお考えですかね？——いや——どうぞ「大きな夜番外」の許可証のところをお読み下さい——
それからトリムの「ズボン」の権利放棄のところ——そら、「借地証書」と「放棄確認証」がそこにはつきりあるで
しょうが——それがまさにそれですよ、あなた。——ただちよつとばかり違いはありますがね——そして実は、賛
辞の全体的な力強さつてのは、その違いの中にあるんですがね——つまりですね、「物語」の作者は凡そ十行のうち
に——あなたが、法律のご大層な榮譽ある冗慢さをもつてしても、羊皮紙の、同じ行数の中に押し込めることの
なわなかつたものを——表現し、よく伝えておるといふことですよ。

この日の午後、右とよく似た用件で、三ポンド六シリング八ペンスのお金をこの弁護士に払っておった薬剤師が——牧師の、この当意即妙の答えに大層満足させられて——それで奴さん、両の手でごしごしともみ手をして得意の表情——そこで高らかに勝利の大笑いとはあいになった。

これが弁護士の注意を逃れることが出来なかつたのは、この原因が彼の洞察力を逃れることが出来なかつたと同様。

薬剤師殿よ、と弁護士(その声を三分の一がところ低めながら)、貴殿及び貴殿の御説がここで誰よりも勝ちを占める訳はないのですからな、その失敬な馬鹿笑いはおやめになった方がよろしいですな。——ひとつおまえさんと彼は続けて、トリム奴が遠い所をわざわざ求めに行つて、非常に真面目な様子で、ズボンのポケットに入れて、「牧師」の切られた指にまきつけるために取つて戻つて来た、あの「クモの糸」のことをすこしお考えになると如何ですか。——この「クモの糸」はまさに、あんたも病人や、無知な者や、ものを疑わない連中からまきあげて、一財産もうけておる、その薬屋業の一半の、卑しい性質に対する見事に「織られた」諷刺なんですな。——それから「室内便器」の教える教訓について言えば、これはもう明々白々、——どんな行為でも、またおまえさん達がその色ににしまつておられる商売でも、その十分の九がところは、皆んな集合して、あのいやな用器の中に納まつてしまふでしょうが?——そこで、よいか薬屋殿、と弁護士、声を高めて、——おまえさんのその間抜けな笑いがおまえさんの判断力を失わせていなけりや、おまえさんは、トリムが頭に便器をのつけて、町の通りを端から端まで恥ずかし気もなく運んで行つたのは、これは痛烈なからかい——今までおまえさんに向けられたうちで最も

ひどいあて、こすりの一つだつてことに気づいたつたろうに。——それというものもこれはだねえ、見るところ金さえ手に入れば何でも結構、恥ずかしいなんて考えやしない、おまえさんと同業連中全部の、真面目くさつたずうずうしさのバケの皮をひんむいておるんだからね。

ところでその席には、先に述べた外科医の他に二人の薬店主がいて、それらに一人の薬種屋と一人の葬儀屋といつた同業者連中がついていたが、彼ら五人とも同様に、この弁護士の乱暴なしつぺい返しにいたく傷つけられ、これに対して大いに不満の念を抱いたのである。——そこで胸に含むところ大なる彼ら五人の同業者連中うち揃つて、彼らの椅子から立ち上がる、そこで直ちにこの「激しい詰問」⁽⁴⁾の返上をしようという心算。——したところで、この合戦がこのままでは大きく広がるばかりと懸念した議長、直ちに「静肅に！」と押し止めた。——そして、もしこの席でまだ発言せずして、なおこの問題に関してしゃべりたいむきがあれば、直ちに意見を述べられるようにと提案した。

これは、或る吃音の会員には幸運な誘いであつたが、この御仁、せいぜい声を出しても弱くしか出ない様子、しばしば論争の最中に発言しようと試みたがかなわず、全く絶望的に機会を逃がして坐つていたところだつた。

この御仁、お見知りおき願ひたいが、自分に対して耐えがたい苦惱を与えたところの、先の「選抜」指名に洩れたことで、ゆううつの上に打ちひしがれるような悲しみを抱いておつたのであつた。——そこで要するにこの御仁が、他の事は何も思いつかなかつたのも無理はない。それやこれやのために、彼は、「物語」全体は、先のヨーク市の選挙に対する正当なあてこすりであるという強い意見を固めていたのである。私は思うんですが、と彼は言った。

「半ズボン」の約束が破れたということは、実際は誰か他の人の約束が破棄されて、我々の間にひどい騒ぎを引き起こした事件を、見事に表わしているのではないのでしょうか。

——かようにして、全員が自分の頭の表面に遊泳している連想のままに、この話を△翻訳▽していったのであった。——従つて、全部が済む迄には、この話から、皆の頭数と同じぶんだけたつぷりと、諷刺の糸があやつり出されたのである。——そして、かの三重にも有名なガルガンチュアとパンタグリユエルの冒険談の中に発見される如き、変転極まりなき人物・意見・交渉そして真実が、その寓意のヴェールの下に隠されていることが判明したのであった。

ここですべておしまひになり、クラブも解散されようという時になつて、——議長殿が椅子から立ち上がり、二つの動議を出させて頂きたいと申し出、それがただちに全員一致で認められた。

第一はですな諸君、と議長がはじめる、「物語」の中の、トリム奴の、言いつくろい、陰謀をめぐらす人物としての性格は——それが誰のことを描いてあつてもですな、実際のところは、「フランス王」にいかにも良く似て描かれておりますからな——ここでわしは、この「物語」が即刻刊行されるよう提案したのでありますわい。——それと申しますのは、と彼は続けて、もし我々が一回でも奴さんをももの笑いにして、自分の仕出かしたことを恥ずかしく思わせることが出来ますならば、それは神の、我が国海軍及び陸軍に対する恩寵とともに、ヨーロッパの自由を守る偉大な手段となることが出来ますじやろう。

第二の提案としましては、我らの価値ある会員でありますところの弁護士殿が、この場でただちに、ここでしや

べった会員諸氏の、「物語」に与えた臆説をことごとく書き留めておかれたいというものであります。思うにこのことは、と彼は続けて、二つの目的にかなうでありますよう。

ひとつ、これは、永久に我々のクラブの政治的見識を確立し、これを世間にりっぱに示してくれるでありますようから。

ふたつ、これは、話の中の不足の分を補ってくれるでありますよう。即ちこれが、「物語」に対する一つの「鍵」になりましようからな。

そこは本当なら議長さん、「鍵」の一束全部、と言うべきだったですなあ、と唯一人論争中には何も言わなかった錠前屋が話を引きとったが、しかしそこは議長、反論して言うことには、しかしまあ言わせて貰うなら、ほんとに「正しい鍵」がひとつ、見つけれさえするならば、集まったすべての△意見▽の鍵束も、要らなくなるんじゃないか。

注

(1) エヴリマン版の注によれば、ヨークにあった「サントン」というコーヒー・ハウスがモデルであるという(一六一頁)。

(2) 「フランスの王」ルイ十五世(一七二五―一七四)。実際は平和的な王であり、国政は愛妾ボンバドゥール夫人一味などに左右され、イギリスとの植民地抗争に決定的に破れていった。七年戦争(一七五六―一七六三)は彼の治世の間に起こった。

- (3) ジョージ国王陛下 イギリス王ジョージ二世(一七二七—一七六〇)のこと。フランスとの間に植民地戦争を争う。
 プロシア王 代表的啓蒙専制君主フリードリヒ二世(一七四〇—一八六)のこと。外に対しては領土を拡大した。ここに
 ある「サクソニー」(ザクセン)の地もその一つ。
- (4) 「サクソニー」(G. Sachsen)もと東ドイツの州にあった旧王国。フリードリヒ大王がザクセンに侵入したのが一七五
 六年、七年戦争の始まりの年である。なお「鍵」の章の、「議長」が、「現在の戦争」と呼んでいるのはこの戦争のこと。
- (5) 「マーク・スリム」「マーク・スレンダー」は「権争物語」中のMark Braithwaiteという人物。ここでは「マーク・ス
 レンダー」と「ロリー・スリム」をわざと一緒になっている。
- (6) 「ワラ人形みたいな男たち」「権争物語」の「追伸」の中で言及される。シェイクスピア『ヘンリー四世第一部』第二幕
 第四場、一九六行前後でフォルスタッフが「men in buckram」に襲われた話をする個所を踏まえている。
- (7) 「ブラッセル・ガゼティア」 *Brussels Gazetteer* スターンと確執があった叔父のシェイクスが出していた『ヨーク・
 ガゼティア』を示唆するか。「序に代えて」参照。
- (8) ブウルボンとオーストリア フランスの王室(一五八九—一七九二)ブウルボン家と、オーストリアのハプスブルグ
 家。三十年戦争、スペイン継承戦争、オーストリア継承戦争、七年戦争などすべてこのハプスブルグ王家をめぐる行な
 われた。
- (9) ウイリアム王及びアン女王戦争 名譽革命によってイギリス王となったウイリアム三世(オレンジ公)(一六五〇—
 一七〇二)。即位の一六八九年、フランスと開戦。植民地でフランスとハウリアム王戦争(一九七)を始める。
 アン女王戦争 一七〇二—一七〇三年まで続く。ウイリアム三世の後を受けた、アメリカにおける対仏植民地戦争。一七一
 三年ユトレヒト条約によってイギリスはフランスからハドソン湾地方等を得た。

- (10) 「分割条約」The Partition Treaty ウイリアム三世がルイ十四世との間に結んだスペイン分割の二度にわたる企てのこと。ウイリアム王はこのあと、対仏軍事行動を起こそうとして急死。
- (11) 「ジブラルタル」イギリスがスペインのジブラルタルを占領したのは一七〇四年。スペイン継承戦争に関わる。
- (12) 「中ズボン」Trunk-Hose 十六—十七世紀初めに流行した、カバンをふくらませたような、あるいはショートパンツをふくらませたような形のズボン。
- (13) 法律文字 「権争物語」の中で夜番外套の譲渡方法を定めた覚え書の部分。スウィフト『桶物語』第二章の、或る父親が遺言の中で、「上衣」を三人の息子に与えるエピソードからヒントを得たと思われる。
- (14) 「激しい詰問」Reproof Valiant シェイクスピア『お気に召すまま』第五幕第四場八十二、八十九行。タッチストーンがジェイクイズと公爵に向かって決斗の七ヶ条を説明する所。これはその第四条に当たる。

〔付記〕 以上の翻訳にさいして使用したテキストは、次の版により、他にエヴリマン版、ペンギン版テキストも参照した。

Ian Jack, ed., *A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick to which are added The Journal To Eliza and A Political Romance*. Oxford & New York: Oxford Univ. Press, 1984.

書誌的解題

一

このパンフレットの題名が統一的でないということが、訳語を決める上での一つの問題点である。『権争物語』“A Political Romance”というのが、スターンがもともと付していた題名であるが、後には『夜番外套物語』“The History of a Good Warm Watch-Coat”の方が通りやすい題名となっているといった事情があることについては先にも述べたことである。そこで、W・L・クロスのスターン伝に付けられた書誌によってテキストの出版過程を見てみよう。初出は当然のことながら、一七五九年の、ヨークにおける教会の内紛にスターン自身もかわって、このパンフレットを書いた年であって、表題、目次内容をみると次のようになっている。

1. *A Political Romance, Addressed To——, Esq; of York. To which is subjoined a KEY. /Ridiculum acri/ Fortius et melius magnas plerumque secat Res. /York: Printed in the year MDCCCLIX.*

その内容を番号を付して順に列挙する。

- (1) A Political Romance, Addressed To——, Esq, of York.
- (2) Postscript
- (3) The Key

- (4) Letter to ——, Esq.; of York
(5) Letter to Dr. Topham

というふうになっている。イアン・ジャックの編集によるテキスト（一九六八年・Oxford English Novels）もこの初出の形を守ったものであり、ちなみに筆者が訳出したのも、右の内容の中の(1)と(3)であるが、以後のテキストはこの初版をもとにして色々な選択と省略を行なっている。物語の中心の筋は(1)(2)(3)で語られており、(4)と(5)の書簡はさほど重要ではない。

当時のヨークにおける教会の内紛の火消し役を担ったこのパンフレットは、今日四部が残存し、それぞれヨーク参事会図書館、ヨーク公立図書館、ケンブリッジ、トリニティ・カレッジ図書館、及びマサチューセッツ州ケンブリッジのハロルド・マードック氏の所蔵となっている。このうちヨーク参事会図書館の分のリプリント版が、一九一四年、W・L・クロスの序文を付して、ボストンで出されているが、これについては後でまた言及することにする。

次に刊行されたのが一七六九年で、表題は次の通り。

2. *A Political Romance, Addressed To ——, Esq. ; of York.* London: J. Murdoch, MDCCCLXIX.

これは初版のリプリント版であるが、(3)の「The Key」と(4)(5)の書簡が省略されている。この版の基になったのは、スターンが友人のジョン・ホールルステイヴンソンに与えた初版の一冊であると考えられている。

三度目の出版は一七七五年で、スターンの「書簡集」の中に組み込まれているといった体裁になっている。注目

三 すべきは、この版ではじめて、"The History of a Watch-Coat"の表題が使われていることである。この版のタイトルは次の通り。

3. *Sterne's Letters to His Friends on Various Occasion. To Which is added, his History of a Watch-Coat, with Explanatory Notes.* London: G. Kearsly & J. Johnson, 1775.

但し、この"Watch-Coat"は、初版の要約版をリプリントしたもので、これ全体が一つの手紙として扱われ、デイヴィッド・ギャリックその他の知人とやりとりした書簡と一緒にまとめられている。"A Political Romance"全体が書簡形式を取っているので、一七七五年版で書簡集の中に入れられたということは不思議ではない。スターンのもう一つの書き物である*The Journal To Eliza*がL・P・カーティス編『ローレンス・スターン書簡集』の中に組み込まれていると同断であろう。A *Political Romance*と*The Journal To Eliza*もリチャードソンンの『ペニリン』（一七四〇年）ヤスモレットの『ハンフリックリンカ』（一七七一一年）などの書簡文学の当時の流行の文脈の中で捉えられるものであろう。が、より直接的には、この"Romance"が、すでに交されていた三冊の書簡形式による論争パンフレットの後に出されざるを得なかったという事情に拠るものであろう。

ところでこの年、T・エヴァンズという出版社が加わって、右と同じものが出版されている。これは表題に、"A New Edition"と銘打たれている。同年ハンブルグで、ボーデによるこれらの独逸語訳、一七八八年にはパリで、ラ・ボームによる仏語訳が出ている。

要するにこの一七七五年から、*A Political Romance* は、その中心的なストーリーを表わす*The History of a*

Watch-Coatとして、広く大陸においても知られるようになったと言えよう。

次に現われるのは、一七八〇年の『スターン全集』十巻本においてである。この全集はスターンの作品に対する初めての原典批評研究版であり、研究用のテキストとして価値ある最初の例といえることが出来る。この中の第十巻に収められている“The History of a Watch-Coat”に対しては、その現実的事件・人物と、物語りの中のプリティカルな事件・人物の諷刺的対応関係が、脚注の形で説明されている。一九〇四年に出るW・L・クロス編の全集中の脚注もほぼこれを踏襲したものである。この全集のタイトルと構成は次の通り。

4. *The Works of Laurence Sterne. In Ten Volumes Complete. Containing, I. The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gent. II. A Sentimental Journey through France and Italy. III. Sermons. IV. Letters. With A Life of the Author, Written by Himself. London: W. Strahan, J. Rivington and Sons, J. Dodsley, G. Kearsley, T. Lowndes, G. Robinson, T. Cadell, J. Murray, T. Becket, R. Baldwin, and T. Evans, MDCCLXXX.*

この版が、ロンドン出版業者たちの共同出版という形になっており、またスターンの友人ホール・ステューヴンソンが、スターンの覚え書をもとにして仕上げたと主張している『センチメンタル・ジャーニー』の続編、『それからのセンチメンタル・ジャーニー』*Yorick's Sentimental Journey, Continued* (一七六九年)がはなされてきたことを考えると、この編集者はわりあい厳正に、かつ力を入れて編集に当たったものと思われる。最後の第十巻の内容は、

“Letters of the late Laurence Sterne : With a Fragment, in the manner of Rabelais ; and The History of a Watch-Coat”

となつてゐる。この中の“Watch-Coat”のタイトルを詳しく記すと、

“The History of a Good Warm Watch-Coat ; with which the present Possessor is not content to cover his own Shoulders, unless he can cut out of it a petticoat for his wife, and a Pair of Breeches for his Son.”

と云うやうに、*A Political Romance*の中の言葉をそのまま用いて長くなつてゐる。ちなみにこれと同じタイトルは、一九〇四年のW・L・クロスの版においても、従つてまた、AMS社のヨリック・エディション・デラックス版においても用いられている。しかしこの版には、初版一七五九年版の中の、(3)、(4)、(5)の部分は付けられていず、後に出た一七六九年版及び一七七五年版の形式を踏襲したものと考えられる。

十九世紀の間に刊行されたものは、書簡類が殆どであり、それらの中で、一八六四年と一八九六年の、パーシィ・フィッツジェラルドによる『ローレンス・スターン伝』二巻が注目すべき出版物である。一八七三年に四巻物の、ジェイムズ・P・ブラウン編集による『スターン全集』が出てゐるが、W・L・クロスによれば、この全集版は、数種の書簡およびレノルズ以後の、ストザードやクルックシャンクによる図版を例外として、一七八〇年版の先の全集以後の新しい資料は何も加えられてはいない。

二十世紀に入つてからの全集及び“Watch-Coat”の二種類の校訂の仕事はともにW・L・クロスによるもので、そのスターン伝も含めて、これらはこの世紀におけるスターン文学研究の礎となった。まず一九〇四年の全十二巻の

全集のタイトルと内容は次の通りである。

5. *The Works and Life of Laurence Sterne*. 12 vols. With an Introduction by Wilbur L. Cross. New York: J. F. Taylor & Company, 1904.

このうち第十一巻及び最終の第十二巻に、先のパーシー・フィッツジェラルドのスターン伝をおさめているのが特徴で、他は、第一―四巻『トリストラム・シャンデイ』、第五―六巻『ヨリック氏説教集』、第七巻『センチメンタル・ジャーニー』、第十巻『イライザに寄せる日記・その他』である。そして“Watch-Coat”のテクストは、第八―九巻の『書簡及び雑録集』の中に入れられている。その表題は先の一七八〇年版同様、‘Good Warm’という形容詞が付いて *The History of a Good Warm Watch-Coat* となっている。つまり、この書き物には三つの呼び方が用いられている訳で、さらにクロス自身が十年後の一九一四年に刊行した“Watch-Coat”のテクストでは、題名をもとの *A Political Romance* にもとめているところを見ると、いずれの名称でこれを呼ぶべきかについて定説はないのである。

ところで十二巻もののこの全集は、同じ年に「クロンメル協会」という所から六巻で再版された。(一萬部限定出版。) 後にAMS社から出たリプリント版(ヨリック・エディション・デラックス、一九七〇年)は、この「クロンメル協会」版を基にしたものである。これに収められた“Watch-Coat”のテクストが“A Political Romance”と“Postscript”のみであるのは、一七六九年版以来のスタイルを守ったためであろうか。

ところが一九一四年に、ボストンの「端本クラブ」という所から出した版は、一七五九年の初出の形をそのまま

三 保っている。表題は次の通り。

附論 6. *A Political Romance* By Laurence Sterne (1759): An Exact Reprint of the First Edition. With an introduction by Wilbur L. Cross. Boston: The Club of Odd Volumes, 1914.

だがこれは百二十五部の限定出版であり、とうてい世間に広く流布するところまではゆかなかったであろうと思われる。

クロスの版と共に、二十世紀の代表的なスターン全集となっているのは、次に出るいわゆる「シェイクスピア・ヘッド」版全七巻の全集（一九二六—二七年）であり、この中に“Watch-Coat”も収められている。クロスのスターン伝（一九六七年第三版）の書誌は、一九二三年の記述で終わっており、この「シェイクスピア・ヘッド」版のことは当然出て来ていないのであるが、幸いにも手もとにこれがあるので紹介しておこう。表題、内容は次の通り。

7. *The Shakespeare Head Edition of The Works of Laurence Sterne*. 7vols. Oxford: Basil Blackwell/Publisher to the Shakespeare Head Press of Stratford-Upon-Avon, 1926—27.

このうち“Watch-Coat”は第六巻で、『センチメンタル・ジャーニィ』『ラブレー風断章』『イライザに寄せる日記』『ヨリックからイライザへの書簡』等と一緒に収められている。校訂者の名前がないのが残念であるが、この校訂者はクロスの版と異なり、表題には“A Political Romance: Addressed to ——, Esq; of York”を用いている。そして校訂者の言によると、この版は一七六九年に出た二つの版——一つは先に挙げた版、もう一つは「五巻本の全集」——の慎重な比較検討のもとに編集されたようである。クロスの書誌で一七六九年の項に挙げられて

いるのは、スターンの「説教集」と“A Political Romance”の二つだけであり、「五巻本の全集」というのがいずれのものを指すのか不明であるが、校訂者が一七六九年版を基として⁽¹⁾いる故に、題名を“A Political Romance”としているのは首肯である。

この版における“Watch-Coat”の内容が、(1)“A Political Romance”と(2)“Postscript”のみであり、脚注はついていない。但し登場人物と現実の人物等の対応関係を次のように配役表の如くに表わしている。

Late Parson,	Abp. Herring
Parson of the Parish,	Abp. Hutton
John the Clerk,	Dean of York. Fountain
Trim,	Dr. Topham
Mark Slender,	Dr. Braithwaite
Lorry Slim,	Lawrence Sterne
William Doe,	Mr. Birdmore
<i>Village, York</i>	

ところが、この表には一つ疑問がある。それは、William Doe——Mr. Birdmore——という対応関係についてである。どういふもWm Doeなる登場人物は一七八〇年版以来、William Stablesという法学士をあてはめる解釈がなされて来ているからである。(一七八〇年版全集第十巻一八六頁、一九七〇年AMS版第四巻二四五頁。) もっとも、William Birdmoreという人物が物語の中のWm Doeに相当するどういふ説もある、という説明は、たしかにパーシイ・フィッツジェラルドのスターン伝(*Percy Fitzgerald, The Life of Lawrence Sterne, Vol. I. London: Chapman*

三 & Hall, 1864, p.352, foot note) にあって、シェイクスピア・ヘッド版の校訂者は恐らくこのような箇所を典拠にしたのではないかと思われるのであるが、しかしフィッツジェラルドをも校訂したW・L・クロスの説明(『スターン伝』、一六七―八頁)を読むと、フィッツジェラルドよりはるかに詳しく説得的であり、いわばフィッツジェラルドを克服していると思われるのであって、それ故クロスより後に出るこのシェイクスピア・ヘッド版で、クロスを無視してそれ以前のフィッツジェラルドの説明に典拠を求めている様なのは、よほどのうらづけがあるのであろうと思うのだが、その説明もなく、ましてや校訂者の名も記していないのは、多少の疑問をこの校訂本に対して感じざるを得ない。

問題は「ヨーク大聖堂首席司祭および参事会会員」と「ピカリング・ポクリントン特別教区法廷主教代理」のパートメントをめぐる悶着で、これらを主人公トパムが取ろうとしたのだが、しかしゆきちがいがあって他の人物に渡ってしまう。そしてトパムがこれに対して異議申し立てを行ない、ひと騒ぎそこでもちあがる、といったあらましである。このさいの「他の人物」というのが、クロスの説明によれば、William Stablesという人物であり、一七五一年八月一日、彼は首席司祭から大聖堂参事会の主教代理職というパテントを与えられるのである。このときの決定の場に、トパムと敵対する側に、つまり首席司祭の側にいるのがCharles Cowper及びWilliam Bermore [sic] という参事会会員、そしてわがローレンス・スターンなのである。(スターンは先のパテントの後の方、つまり「ピカリング・ポクリントン特別教区法廷主教代理」のパテントを貰うことになるので、トパム博士の手には何も入らなかった訳である。)クロスの記述ではWm Bermoreはただ右のような文脈の中で言及されるだけで、特別な説明は

ない。クロス立場は明確に、'Wm Doe'をWm Stablesとする立場である。そしてスターンがこのなりゆきの中でパテントを貰うのは、面白い「しつぱい返し」だと言ひ、記録は見つかっていないが、スターンのパテントは、Wm Stablesが例のパテントの権限者に選ばれた¹、二週間以内に与えられたものに違ひない、と説明している。('スターン伝'、一六八頁。)ここで少し話がそれるが、もしこのクロスの説明が正しいとすれば、スターンがそのパテントを受けた月日は、一七五一年の「八月」の一、二週間以内ということになる訳だが、岩波文庫の『トリストラム・シャンディ』下巻の年譜を見ると、「一七五一年(三十八歳)／六月、ピカリング・ポクリントン特別教区法廷主教代理に任ぜられる」とあつて、⁽²⁾ 時期的にずれがあるのは、伝記上の事実を特定することの困難さを示唆する問題である。

ところで、クロスと同じ判断に立つて、Wm Doe=Wm Stablesの関係を示している最も近い例——否、それのみならず、最も新しい“Watch-Coat”のテキスト——は、イアン・ジャック編集の「オックスフォード・イングリッシュ・ノベル」版である。そのタイトルを挙げておこう。

8. *A Sentimental Journey through France and Italy By Mr. Yorick to which are added The Journal to Eliza and A Political Romance.* Ed. with Introductions by Ian Jack. Oxford & New York: Oxford Univ. Press, 1984.

この中の *A Political Romance* は、初出時の残存する四冊のうち、ケンブリッジ、トリニティ・カレッジ図書館蔵のものをリプリントしたもので、スターンが当時の印刷屋シーザー・ウォードに命じた注告——“To ——”、

三 Bsq. of York”の中にある、一語一句読点たりとも動かしてはならぬ旨の注文——を厳密に守った版である。イアン・ジャックはいわば、このパンフレットをスターン自身にもどした訳で、われわれとしては現在これが最も満足すべき版であろう。『権争物語』は、この直後に書き始められる『トリストラム・シャンデイ』への内的うながしとなった書き物であり、すでにその時、スターンの八書くこと∨は、『トリストラム・シャンデイ』の世界に入りこんでいたであろう。その意味で見逃すべきでない八作品∨なのであるが、そうである以上、初出の形式を守った版、

しかも最も新しい原典批評を盛り込んだテキストが、最も満足すべきものであることは当然であろう。

以上で、今日までの“Watch Coat”のテキストの各版について一通り見てきた訳であるが、そのタイトルについては結局二種類のを適宜使用する他ないであろう。筆者は仮に、折衷的のだが、『権争物語』あるいは夜番外套物語』と呼んでおきたい。今日までの各版を見て、テキストとしては初出の形式を守るのが妥当であるが、一方では、“Watch Coat”の表現を取入れた方が、この書簡形式の書き物の内容についてのイメージを、より明確に浮かび上がらせ得ると思われるからである。

二

さて、これまで未紹介の部分は、(2)“Postscript”と、(4)及び(5)の美さいの書簡である。以下、簡単にそれらの内容をしるしておこう。

(2)「追伸」では——

「先に書いた手紙を配達人に渡そうと思つていたが、その機会を失してしまつたので、手紙はそのまま一週間か十日ほど△私▽の手もとに残つてゐるということになつた。ところがその間に、またまた△トリム▽（実さいはトム博士）が事件を起こした。私は、あんなにさんざんな目にあつたのだから、トリムもおさまるだろうと思つてゐたのだが、彼は大人しく引つ込んでゐるところか、去勢、専門屋のつゝの笛を吹きならして町の人間を呼び集め、ひと騒ぎ起こそうとした。トリムの言い分は——自分は前の大げんかの時、犬よりも冷たくあしらわれ、十二人のバックラムワラ人形みたいな連中から三時間も剣の先きでもあそばされた。その上、△ジョン▽の家に待伏せしてゐたケンダール織物を着た二人の卑しい悪党やらが、総勢十六人で自分のうしろから襲いかかつて来て、自分をひどい目にあわせた、というもの。これを十二回以上も聞かされた近所の連中は、トリムは気が触れたと思つて大いに同情した。

この後、トリムは△半ズボン▽のことはあきらめたが、新しく今度は、故人となつた或る牧師と△ジョン▽の間で少しく問題となつてゐた△聖書台▽のことにいちやもんをつけ始めた。トリムは△半ズボン▽と△夜番外套▽を貰えなかつたので、その腹いせに、これに目を付けたのだつた。トリムは△夜番外套▽を貰えなかつた時は、△半ズボン▽の後ろへ回つたし、△半ズボン▽が手に入らないとなると、△聖書台▽の後ろへ回つた、今度はどんな咎へ後退するか分からぬ、と村の政治屋どもの間では、議論がわかれた。或る者は、「牧師の長グツの後」へと、——だがその抵抗も長くは持つまいから——或る者は「牧師の馬」の方へ——と言つたが、馬は簡単には手に入らないだろうから——と、今度は皆の意見がまとまつて、「室内便器」の方へゆくだろう、いずれにしろあまりいい目に会うことはあるまい、という結論になつた。しかしこれらは想像の上でのこと。実さいは如何なることにあい成つたか。

実さいは、トリムは例の△聖書台▽の後方から、自分の身が未だ生まれざる子供のように潔白なことを主張した。ところがその最中に、ブラシ天の△半ズボン▽を穿いた男（実はスターン自身）の思わぬ反撃に出会って、トリムは敢え無く野原を敗走する次第となった。それ以後トリムの行方はとんと分からぬが、誰しも納得したことは、トリム奴は、三つの戦のそれぞれにおいて、これまでの如何なる英雄も経験したことのないような、ひどい「刈り取られ」方をしたものでない、ということであつた。」

以上が「追伸」の章で語られる話である。中に△聖書台▽が出て来るのは、ニコラ・ボワローの『見台物語』の影響として、さらに△外套▽のアレゴリーは、スウィフトの『桶物語』からの影響として説明されるものである。

(4)の「ヨークの某氏殿へ」では、スターンはこのパンフレットの作者が自分であることを公表し、この『ロマンズ』の文句の一言半句、一句読点たりとも動かさぬこと、二羽の闘鶏のさし絵のアイデアはよろしくないこと、パンフレットの値段を「一シリング」に上げるべきこと、この書き物はまぎれもなく「私自身の頭脳から出て来たもの」とすべきこと、等を印刷屋シーザー・ウォードに対して主張している。

(5)の「トパム博士へ」は、トパムがひき起こした騒動の中で出された三冊のパンフレットのうち、三番目のトパムのパンフレット「A Reply to the Answer to a Letter Lately addressed to the Dean of York」（一七五八年十一月二十六日付）に対して、スターンがトパム本人に宛てた書簡であり、この中で彼は、貴殿（トパム博士）の名は先の文書には見当たaraぬが、貴殿のものに間違いなしと見てこれをしたため申す、貴殿の文書の中にあつた例の Dr. Herring, Dr. Berdmore として小生自身の、三名の署名になる文章に関して、そこに立証された事実関係への小

生らの確信については、それを「失効」となすべき証拠が「記憶シ信ズル限りデハ」という例の表現の中にあるのではないか、と貴殿は申し立てておられるが、他の二人については申す可きにあらざる故に小生一人のことにとどめおくが、小生に関しては、あの言葉にいささかの疑問の点もこれ無く、また小生の記憶についても疑念を持たざる点、御了解願いたい、かような異議申立てを誘引したるかの文句は、もはや削除されたし、というようなことを書いている。そしてまた、貴殿の返書の中の、下品なる、キリスト教徒にふさわしからぬ揶揄表現などについては、何しろ小生は神に仕える身、許してさし上げるのが小生の義務なれば、何も言わぬ。だが、トバム殿よ、そんなあてこすりばかりやっていると、やられた相手よりはやった本人の貴殿が、よけいに傷つくことになる、はじめの怒りが静まれば、いつそう悲嘆にくれるのは却って逆に貴殿の方ということになる。カクノゴトキ仕返シコソガ何ヨリ重大ナノデスゾ (*Prima est haec Ultho. Juvenal, Satires, xiii. 2*) といったふうにスターンはトバムを懐柔してゆく。そして最後に、追伸を付して、この書簡をこの『ロマンス』のしりに「貼りつける」のを許していただきたい、何しろ「馬車」がもうそこに来て待つておるし、丁度空いた席もあることだし、そこに入れて貰うとまことに好都合この上なしであり申す故に、といったようなことを言つて終わるのである。

以上が、(3)、(4)、(5)の部分のあらましであるが、(4)や(5)を読むと、スターンの中に、もはや「作家意識」といつてよいものが現われていることに注目させられる。そして、(1)―(2)―(3)を通して見られる喜劇的感覚と、(5)に見られる、相手(トバム博士)に対する或る種のやさしさといったものは、まさにスターン文学の特質である笑いとヒ

注

- (1) 「一七六九年、五巻本のスターン全集はスターン死後の最も早い全集として注目されるが、その記録はAuthor Union Catalogue (*Eighteenth-Century British Books: An Author Union Catalogue, Extracted from the British Museum General Catalogue of Printed Books, the Catalogues of the Bodleian Library and of the University Library, Cambridge*. Cannon House Folkeston, Kent: William Dawson, 1981) によれば“Works... prefixed... account... life/1769 (5v) 12° L”とどう記述内容に相当するであろう。「一七六九年、五巻本全集、十二折本、ブリティッシュ・ライブラリー蔵」とどういふことである。また、ブリティッシュ・ミュージアム(ライブラリー)のカタログ——*British Museum General Catalogue of Printed Books: Five Year Supplement, 1971-75 (vol. 12)*——に“The works of Laurence Sterne. London, 1769. /5vol.: plate: port. 12°/No publisher named”とあるのは同じ情報を伝えていふと思われる。
- ケンブリッジ大学図書館のスターン資料「オーツ・コレクション」のうち、全集の初期の資料は、「一七七四年、七巻本、十二折、ダブリン、トマス・アーミティジ」の版である。一方、オックスフォード、ボドレイアン・ライブラリー所蔵の初期の全集は「一七六九—七〇年、七巻本、第四版、十二折、ダブリン」である。スターンの死後一年ほどで、「第四版」を数えたというのは驚くべき記録である。

- (2) A・H・キャッシュの『スターン伝』も「William Doe=William Stables」説である。(特に、後篇、三六四頁。) キャッシュによれば、スターンが首席司祭ファウンテンから、「ピカリング・ボクリントン特別教区法廷主教代理」の就任

を宣誓、約束させられたのは、「二七五一年七月十二日」である。(前篇、二四七頁。)

